

幻の繪馬

泉鏡花

—

薄紫の櫻街樹にかゝつた、颯と明い一時雨ではあるけれども、雨具なしに、美しい那の姿で、と電車
の裡では、お互様御多分に漏れぬ男ばかりか、容色
と服装の事に掛けては、敵同士も尋常ならぬ女で
さへ、中腰に窓に縋つて、故と見送つたのがある。

電車が麻布の高臺の、唯ある停留所で留つた時、
麻袴を亂して掛けた、其の雨の中へ、猶豫はず蓮葉
に下りた婦は、中脊で華奢だから、少く二十一二に
見えるが、目もとの色氣は四五と云ふ處であらう。

お納戸に紺と藍、細く紅絲の交つた、やたら縞と
か云ふ一枚小袖。友染の長襦袢は、水色地に淺葱と、
薄萌黄と、燃えるやうな緋で、海松輪の絞りばなし
が、二と目立つて、ちら／＼不知火。

容色もまた凄いほどで、半襟は紫紺に縫の銀絲の波、眞紅の枝珊瑚を處々に浮かして沈めた。帯は見え、黒縮緬の紋着の羽織の袖を、撫肩をしめて胸に合せた、其の服装で、前後も見ず、すつと出た、雨の中。

踏段にひらりと、蹴出襖の海松輪も、大路にちらめいた半襟の其の枝珊瑚樹も、黒雲は低し、消えつゝ、點る火の紅の風情なれば、淡く亂るゝ雨の脚も、美しい女の肩に、絲の太白の蓑を捌く。

蓑は斜に、時雨は縦に、すら／＼と道を横切る端に、並樹を潜つて、と視ると、櫻の葉が雫の音と共に、はら／＼と下行く紅の影に誘はれて、染まつて、
ニと艶やかな緋を點じた。

「おゝ、冷い。」

濡るゝ身は扱て厭はぬ。が、雪の降る日は寒くこそ、と悟つたやうに、迷つたやうに、そして、ぢれつたい、と云ふ態度で、軽くトンと白く妙な細い頸

黄薔薇紅薔薇白薔薇ヒヤシンス、チユリツプ、濃い
緑のアスパラガス、箱根草など取々に、芬と酔ひさ
うな色の霧の、薫を籠めて、大口の註文の花束を造
る折から。

世間は土砂降に成らうとの、此の紫の雲を見よ、
と商賣柄、浮世離れのした見識で、諸聲に、入らつ
しやい！ など浴びせるのでない。

隠居爺が、捻つた刈萱の葉ぐらゐに乾びた聲で、
「へい、おいでなさい。」

唯、美人が、花束の中に、明い顔して、一寸仰向
き加減に、

「今日は？」

「へい、おいでなさい。おい、何か、小ものゝ、
何か、」

と云ひながら、薔薇の大輪を嘗めるやうに、コト
ン／＼と頭で調子を取つて、葉の中から、横目でじ
ろ／＼、と顔を覗く。・・・屈腰の爺様、氣の
知れない麻布に住んで、七不思議前から草分の甲羅、

龜のトを行つても、此の花主ばかりは、何とも解せない。お姫様のやうな、それしやのやうな、おつとりしたやうな、蓮葉なやうな、觸つても消えさうで、殺しても死にさうもない、意氣づくりの媚かしい、色つぼくて、すつきりした、高島田が圓鬚になり、銀杏返しが女優髪で、今日は櫛巻で居るのを、件の葉がくれ、蟋蟀の如き黒い目で――窺ひ／＼、

「それ、何か、御新姐さんが……え、お嬢様が、何が、おいでなすつた。……お目に掛けねえ、何か、何か。」

若衆が両方へ左右へ別れる、花棚、花瓶、花手桶。

「可いわ。」

と莞爾して、美人が留めて、

「私が勝手に見る方が早手廻しだわ。お爺さん、ねえ。」

「へい。」

「冷いわねえ。」と此の時、おくれ毛を白魚の

指、しつとりとした櫛巻の、緑がしたゝるばかりである。

爺様は、しやつきりと這身の膝に、握拳の両腕を突張らかして、下から天井へ頭で見當をつけて、女の顔ぐるみ見上げると、其處で、ぺろんと唇を舌で嘗めた。

「天井が漏りやすかね。」

女が若鮎の水を切る手首をすつと、禿頭を斜に切つて打つ眞似して、

「可厭な、お爺さん、皮肉だよ……町の時に雨に女が一人傘なしに花屋へ駆込んだんだもの、冷い、と言へば濡れた事は分つてるわ。傘を借りたいぐらゐ、大抵知れさうなもんだわね。」

「へッへい。」と、ぐなりと首を垂れる、と床を擦々ほどに揉手をしながら、

「へッ、へい。」

「あら……」

婦人も、さすがに目が早かった。正面の障子張の格子の蔭で、蛇目傘の柄を此方に向けて、丁度其處へ立つたのは、色白な結綿島田、緋鹿子の手絡、同じ襟、友染の前垂した、お絲と云ふ評判娘

「まあ、」

「へッへい。」

爺様は一輪、黄薔薇の香を、フンと嗅いだ。

「花屋政右衛門、誰だと思召す……電車を降りなすつた時から、ちゃんと心得たもんでがすてへッ、へい。」

「可厭だ。梟が吃逆をするやうね。」

若衆が、あはゝはゝ。……むつゝりだんまりとした悴も笑へば、娘もうつむいて顔に袖。

爺様、目を丸くして、

「これは、如何な事。」

「でも、恐入つたわ、私。」

「何うがすえ、花屋政右衛門、池の坊入道月三齋は、へッへい。」

おツと出直^{でなほ}して今^{こんど}度は咳^{せき}一^{ぱら}咳^ひ。
「えへむ、江戸^{えど}兒^こだてね。」

處へ、横合から珠の燦爛たる指環の手を出した、
四十六七で、若づくりの貴婦人が一人ある。

「私が借りる。此の下女にも一本な。」
と頤で掬つた。瘦せた、頬骨の張つた顔を、眞白
に塗つて、お定りの廂髪に黄金縁の眼鏡を晃乎つか
せた、生際が、辻けたやうにべろんとして、額のて
ら／＼と光るのが、鳳眉と云ふのに、ベツタリと眉
墨を引いて居る。

紫紺の縮緬、銀泥の雲に、鸞鳥の縫あるコオト、
やたらに地のいゝのを、がさりと着下し、何う云ふ
好みやら、萌黄鞣皮の爪皮の掛つた低齒の吾妻下駄
と云ふ體俗。肉色の涼傘を疊んだのを、一人連れた、
肥つた赤ら顔だが、同じく塗つた廂髪の小間使らし
い、其の銘仙の羽織の袖に、恭しく抱かせたのを従
へて、――これは電車から下りたものではなかつ
た――今の美人より一足さきに、反身で花屋の
店に入つて、唯、先づ黙然で棚を見廻して居た處で。

「私わたしな、直ぢき此この横町よこぢやうの角邸かどやしきです。．．．知しつてぢやらうね、榎まきヶ原はらです。」

名なを聞きいては知しらないで成ならうか。儉約けんやくと内福ないふくと．．．鉞はりや按摩あんまの笛ふえではないが．．．音おとに響ひびいた子爵家ししやくけの．．．扨さては令夫人れいふじんであらせられる。

「借かります。」と澄すまして傘かさを御自分ごじぶんが受取うけとつた。

また、其その權式けんしきと威光ゐくわうとは、素町人すぢやうにんの結綿ゆひわたの娘むすめなんぞ、言ことばが返かへさるゝ次第わげのものではない。

「もう、一本ほん．．．下女げぢよにな。」
一寸猶豫ちよつとためらつた振ふるの娘むすめに被かぶせて、言いつて、

「あゝ、すぐ家來けらいどもに持もたせて返かへします。．．．今日けふは些ちとな、慈善事業じぜんじげふの事ことに就ついて、赤十せき字じへ出向でむいたでしてな、故わざと乗物のものを用もちゐんで、俄雨にわかあめで難儀なんぎでな。．．．何なには當家たうけは直接ちよくせつに邸やしきへは出で

入をさせては居らんが、御前様がよく御存じで、御吹聴を遊ばすによつて、上ツ方をはじめ、方々から立派な註文が来るさうに聞きます。よい店ぢやの。あゝ、知つて居ような、槇ヶ原ぢや。」

娘が、最う一本蛇の目傘を持つて出て、此は小間使が受取るまで、子爵夫人が恚う立續けに御意あつたのは、然し娘に向つてゝはない。――爺様を見よ。――花政入道月三齋は、先刻から仕事の手を休めて、地床を這つた、のめり腰の大きな兩提を、ぶら／＼と尻尾の如く片手で捻つて、百日紅の根の自然木の腰掛に、飲み冷しの澁茶と一所に轉がした燐寸で、銀の村田張へ吸つけて、すぱ／＼と吸ひながら、ものをも言はず、一倍、長い顔を圓く縮めて、額で見上げて居るのであるから、夫人の方でも一通り演じないと、何うやら間拍子が悪かつたからである。

「それではな。」

と威儀を正しく、肩で向直つて出ようとすると、娘が會釋したばかり。唾かと思ふ爺さまの黙りさ加

減。で、お刺に頭で潜つて這身に凭込んで、あの、
額で見上げる工合が、何となく不気味なほど仔細あ
りげで、ものが唯では濟みさうも無いので、子爵夫
人は不圖氣がさしたらしく、
其處に、とんと
黒縮の羽織の袖をだらけた風な投遣りに後へ刎ねて、
懐手で、・・・雲に三日月を引攪はれた柳のや
うに、薄ら冷し、詰らなさうな、この美しい女にも、
じろりと目を遣つて、一所に爺様から瞳をはずして、
素焼の大瓶にふさ／＼と突込んだ梅もどきの實の撓
なのと隣合つた、花桶に、冷く輝く薄色の牡丹に對
した。

「室咲ですの。」
「冬牡丹でございます。」と、悴が花の中で珍
らしく口を利いた。

つい、と抜取る・・・葉裏に黄金の太い指環
は、妙に毒ある昆蟲の光を放つて、
「幾千ですか、一本。」
「一圓。」と一ツ頭を突出して、と龜の悶ゆる
如く、腰を振つて、爺様がひよこ／＼と出て言つた。

「一圓？」と、コオトの胸を後へ反らして、夫人は怯乎としたらしい。

其の訛つたのに押被せて、爺様、もう一つ頭を動かす、

「へい、七圓でございますよ。」

「むゝ。」

「七圓でございます、はい。」

「高價いなう。」と両手で枝をくるりと廻す。

「へい、甲州諏訪の湖畔の出来でございますな。へい、其の諏訪法性と云、ふ銘のございます、そりや霜月の一輪咲。もし、奥方様。みの作と申す花つくりが、入念に丹精を仕りました。其の半開が、奥方様、御床の間で一杯に開きますと、蕊が赫と慥う。」

で、大な皺手の両方の指を、じゃわ／＼。

「其の、狐火同然に燃えますと云ふ、無類の逸品にございますので、へい。商賣人にも一寸は手に入

りませんくらゐなもので、金七兩は花政大勉強でございませよ。」

子爵夫人は手にした牡丹を花桶に挿棄てた。其の時威儀を整へながら、

「後ほど……更めて家來どもに取りに寄越す。」と頤で小間使を従へて、蛇の目二本でづつと出る。

「や、奥方様。」

「むゝ。」
「お使を下さいます以前に、他々のお客がございませれば、其の方へ譲りますが、お差支へはございませんまいで、へい、此の儀を一寸承はり置きますので、へい。」

「可いともな、だが、買手は、まあ、有るまいよ、ふゝ。」

と片頬笑をして小間使の顔を見た。

途端であつた。

「お爺さん、私に頂戴。」と、いきなり美しい女が手を掛けた。花政より前に、二と牡丹が薫つて、花片が頷いた。

さすがに顔を赧うした、子爵夫人は、濃い眉を動かして、じろりと睨んだが、

「これ、涼傘に泥がつく。」

と小間使を睨直して、ものをも言はず、ツンとして出合頭。

「豆腐うい。」と、櫻街樹で濡れた荷が出抜けに擦違ふ。

「あら。」

と奥方の涼傘を庇つて、小間使が、ひよいと退く。

「豆腐うい。」

「其のかはり此方は月賦よ、七圓だなんて私、差
當り……煙草もない。」

と袂を反す袖裏の紅羽二重、霞んだやうな瞼で、
袂を覗込んだ様子は、娘らしく仇氣なかつたが、巻
蓑の上包みを引捻つて、ポンと投つたはあられもな
や。

「喜代公、お前持つてるだらう。差上げねえ。」
爺さまに然う言はれて、若衆の一人が、どんぶり
から巻蓑を出して、

「お粗末です。」

「一寸、隅ツ子に口を一ヶ所、振り出しの金米糖だ
ね。ねえ、喜代公。」と花の中の、件の百日紅の
腰掛に、悠然と裙を落す。

「矢張り月賦で買ひますさうでね。」ともう一
人の若衆が言ふ。

「おまけに、名前までお覚えなすつた。」で、

喜代公は苦笑。

「覺えないでさ。月賦の方は忘れても……ねえお爺さん。眞個に借りるのよ。」と落着いて、灰を拂いて、串戯では無いのである。

「えゝ／＼……牡丹一輪、金七兩。黄金縁の大年増が買ひ人はあるまい、ときました處を、ずばりと買つておくんなすつたい、ものは氣合だ。何ね、たゞでも可うがすが、それぢやお前さんが御承知はなさるめえ。……實はね、一枝二分で可いんで、科と言分が癩だから、倍と吹掛けた處を、お前さん、一圓と訛つたから、七圓と押被せた。こゝ等が町内での軍師さね。」

「お父さん、餘りだわ、私ひや／＼した。」と格子の裡から、娘の緋鹿子が白い顔。

「祭禮の腹癒せよ。ねえ、お前さん。」

と今度は爺さん、美しいのゝ巻蓑から、ぱくりと雁首へ吸着けて、

「去年は影祭で沙汰なしさねえ、此の夏だ、お前さん。町内揃ひの提灯で、若え衆が、あの邸へ渡りをつけると、幾千がもんだね、二分にや足りねえ入費だ奴を、お上へ申上げた上沙汰をいたす、さ、ね、何うでがすえ。三太夫も三太夫だが、お上が、とかみのえみためでね、お聞濟に相成らんでがさ。花政入道ぢやねえけれど、町内これで齒が抜けた。提打二つ、暗夜でがせう。景氣ア悪いやね、え、お前さん、御神輿は納つても、入道が納らねえ、其の實、兩足納つちや居ますがね。」

「まだ其ばかりぢやアありませんや。手前どもへも、出入りのね、植木屋が彼の邸へ雇はれたが、ね、お八ツの茶を出さねえ。言種をお聞きなせえ。英吉利ぢや午後二時頃、菓子も珈琲も飲食をしねえとね、何うでがすえ。其のかはり倫敦ぢや牡丹一輪七百弗だ、金七兩直でがせう。はゝはゝゝ、」

「まあ、」と肩のこる羽織の襟を、たをやかに、紐を引いて引寄せながら、うつかり嬉しさうに聞惚れて居た美しい女が、八ツと其の手を胸へ當てた。

「あら、誰、私の名を呼んだ。」

唯、爺さんも、きよとりと目を放して、ひく／＼と眉毛を額で……若衆二人も、ひよい、と恚う其處等を見廻す。――成程、變な聲が、おわか、わか、と言ふやうに響いたのである。

「誰？……一寸、喜代公だね。」

「壮ン、壮ン。」

喜代公は、頸を窘めて、一つお辭儀で、

「いよ／＼お覚え下さつたのは難有い仕合せでございますが、私あまだ、根ツから、へい、貴女の御名前を存じませんので。」

「ぢや何ですかい、唯今の。」

二人が揃つて顔を見た。――一人は枝の鋏刀を控へ、一人は根揃への手を留めて。

「え、わかよ。月賦だから覚えて下さい。姓は錦木、名は和歌子、……鶴女とは申さない。」

和歌の方、和歌の前、和歌子、馬鹿子、
一寸、むき身を賣るやうだわねえ、と獨りでく
す／＼襟に腮を差入れて、唯うつむくと不思議なほ
ど品が可い……が又媚かしい……緋の
肌襦袢が、ちらりと雪の頸を覗いて、紅筆でかいた
や艶書の趣。

爺さまが頭を掉つて、

「串戯ぢやねえ、何だい、今のは。」

「あら、與四郎よ、お父さん、」と、娘が言つ
た。

「何、與四郎か？」

「花藏の中で、また木兎をなぶるんだわ。」

「あゝ、然うだ。」

「花藏だ。」——若衆が聲を合す。

「彼ン畜生、何時の間にか使えから歸つて來せ

て……ちよろりと花藏へ潜りやがつて……
・何うするか、見る、野郎。」

爺さまは、腰に提げた手拭を、兀頭へ引捻つて、
一ツにらしながら、下葉を引分け、藏の縁へひよこ
／＼。・・・・雨がまた一時、店の草も颯と暗い、
穴の上から浴せ掛ける。

「與四、與四郎。やい、與四公。」

唯、返事もせず呪文の如き地の下の異變な聲、

「いろはにほへと、アイウエオ、いろはにほへと、
アイウエオ。」

唯、黄色な猫の目が二ツ、下にも二ツ猿眼、四ツ
目のある怪ものが、穴の暗さを迫上つた。と、云ふ
ものは、一羽、木兎を入れた金網の籠を両手で、干
代能が頂く桶の底抜けて、と言ひさうに出額の天邊
へ捧げながら、面幅廣き鼻ひしゃげて、横撫でをひ
かつかせたのが、穴から階子を踏んで出た。

通街八方、是沙汰の悪戯小僧。電信柱と相撲を取
るやら、郵便箱の上の鯨鯨立、黒板塀で芝居のたて、
假色は使ふ、浪花節は唸る、喇叭は吹く。就中、得

意は自轉車、諸鎧をガツシと合せて風車の如く乗出す、と爺様が大好きの講釋種を横御へで、間垣平九郎藤原忠世と號し、はいヨーツツ・・・矢聲を放つて、鞍上に人なく、鞍下に馬なしだ、それと駈けながらの匍匐。が、其のかはり花主さきへ持つて行く、束にした花は枝ばかり、菊も、椿も薪雜棒。

「おや。」と、とぼんと落馬して、路傍の溝へしよんぼりと遠見の折助、半纏着の間垣先生、身を投げさうに立つかと思ふと、
「そんな、手つきで金魚の餌が掬へるかい、貝杓子を貸しねツたらよ。」と、小兒の手から引奪つて、蜜柑の皮を搔廻す。

此奴が、花藏の中からすぼりと出ると、腰のかひない爺様の捉まへる手が及ぶものか。一足立に、ひよん、と飛んで、店を見て居る娘の前へ、角兵衛冠の木兎籠、ぱツと掉つて、も一つ飛んで、

「ほッほう！」と其の鳴聲。

「あれえ。」

緋手絡を翻然と紅く、薄暗い奥へ眞白な踵で遁込む。

「へい、えゝ、光らしてるはツかしで、晝間まるツ切見えませんや。えゝ、目が見えねえと薄のろく成つて覺えませんか、暗い中で、晃々さしてる處で、いろはから行つてるんです。……いろはにほへとちりぬるを　ー　」

與四郎は素早く美しい女と話をはじめた。

和歌子　ー　美しい女もまた、もの好に小僧を庇ふやうに、腰掛を離れて立つたから、形容にも一つお打擲申さうとした爺様の皺びた拳固の遣場が無い。で、裏を返して額際を引擦つて呆れた顔色。

「鳥と云ふものはですな、私の考へぢや、嘴を開けて聲を出すもんでせう。」

と目を据ゑて、大意氣込な赤い面して、和歌子に話しながら、爺様の顔をきよろりと見て、

「……えゝ？お爺さん、然うでせう。」

「何、何を言やがる。」

「それだもんですから、あの、（わアかア。）

えゝ、此奴なら覺えるだらうと思ひまして

ね。……わアかアー」

はて、柄にもない、小僧は清い聲である。

「やつて御覽、もう一度、……よ。」

「えへゝ、……少しばかり極りが悪いや。」

と、籠を、ふらり。坊主のやうな一分刈の頸窪を

ごり／＼掻く。

「極りが悪いが呆れらい、べらぼうめ、お客様の

前ぢや撲倒すわけにも行かねえ。」

其癖、爺様は、撫でさうな手つきなり。萎えた掌、

今度は苦笑ひの口の蓋して、

「御聞きなさいまし。――餘所からね、お前

さん、其の木兎が來てからツてものは、間がな隙が
な、こびりついて居やあがつてね、途方もねえ、大

丈夫口を利くだらうで以て、睨みツくらで、いろはにほへとを遣りますぜ。鸚鵡や九官鳥ぢやあるめえし、木兎がいろはを覚えて堪るもんですかい。處を、奴め、餘り夢中で、些と取逆上せた氣味合でね。何うやら木兎が憑移つて居るらしいんで、御覽じろ、顔色を。向合つた處は宛然、面形を取つたやうでがせう・・・串戲ぢやねえ、なあ、喜代公、段々相好が肖て來るぢやねえか。」

「眞個ですね、お爺さん、團栗目と云ひ、出額と云ひ、そら、恁ふ云ふ中に、唇を尖がらかす具合がね。」

與四郎は唐突に一本足で、ひよい、と飛んで、

「ほッほう！」

「可厭。」と、娘のやうに、優しく、柔かにはツと退く、裊の揺ぎに、飛模様の絞つた緋が、花屋の店の花の中に、雨を誘つて、ちら／＼と白脛すれに尚ほ燃ゆる、雲暗くして、凄艶である。

構はず。―― 數散らした、花に、葉に、羽織の裾を引くばかり、今度は和歌子が、土間に踞むと、早や其主に心優しく、牡丹が色を映添へて、蓑蟲が化けた體の、木兔に對した面影は、鬢に時雨を掛けながら、睨が颯と晴々しい。……

「お爺さん、何處で、こんなものを捕へたの。」
美女であらうが、小僧だらうが、人氣勢の寄るとさへあれば、胸毛を揺り、下搔の翼を煽つて面一杯にぷうと膨れる。這奴禽中の河豚なるかな。かしりと留木を蹴直いて、
「何だ、こんなものとは。」……きゝ耳の押立つ事、毒ある鱗を振ふに似たり。

「川越の在でがすよ。」
「え、川越の。」と……聞返す。
「なあ、喜代公。」
「えゝ、人間の在です。」
「埼玉だわね。」

「武州埼玉縣人間郡、伊草村だつけかな……」

花を買込みに近國を廻りますものがね、百姓家で生擒にしたと云ふのを、栗と一所に貰つて來たんでございませぬ。」

と花政は剪刀をちよき／＼、カラ鳴りの手ついでに、一枝白菊の葉の蝕を拂つた。

四

話を進めよう。

埼玉の入間郡、伊草村で生立つた、不可思議な百姓一揆の斥候と云ふ形の鳥は、此の日、和歌子の錦木の宿へ、花政の店から籠ぐるみ引取られる事に成つた。――隠居に何も木兎引の道樂あつて、望んで取寄せたと云ふではなし、栗も團栗蕎麥殻ぐるみ、苞に引包みに成つて江戸へ出て・・・第一囷に使ふ、あの、木の葉木兎と云ふのでない。札つきの怪禽、肩がきのある無宿もの。餌は活餌で、豚ぎらひの、牛も小間切では納まらず、鼠も胡麻で揚げろなど、稲荷のおつかはしめ位な贅を言ふ。剩へ娘があれ、恐がつて騒ぐ始末。

「え、お引取を頂きませう、願つたり叶つたり。晩の餌に買込んだ竹の皮づみと、金網の小屋は引出ものに差上げます。」

何の洒落だか、一人ものだからお婿さんに欲いわ、譲つて頂戴、と和歌子の言つた時、二言となしに爺

様が承知した。娘が嫌つたのも事實であれば、それに何の不思議はない。が——やがて、此の魔鳥が、おなじ素性の知れない美しい女の着古した長襦袢、・・・然りと雖も、土佐繪に描いた篝火ほどは燃残つた緋縮緬の袖で拵へて着せた、手縫のひとへ一重の外套を翼に掛け、同一緋の頭巾を頭に巻いた頬被りで、殘月琵琶の花に落つる時、霜の水銀の如き高薨の棟を傳つて、子爵榎ヶ原家の破風口から館を襲ふ事に成るのである。——笥も三國一城を領した、角屋敷の要害を砕くのである。此を使つた美女は、其の夜は、緑の黒髪を背に捌いて、練衣の氷なす白衣にして、星より高く城の塀に立つのである。固より、それは後の事。

次手なれば、白衣の次第を言つて置かう。

此の女が自ら言ふ。——嘗て、露西亞、柴拉利亞（はぶるすか。）に渡つて住んだ事がある。たしか、政府が第十一軍團を置く土地で、軍隊を對手に東西各國の商人が入亂るゝ。・・・これも

商賣、と言ふべくんば、第紅い蹴出しに長靴を穿く、
本朝天草産の女の身。南京の寶玉商人、北京の蜜柑、
林檎賣。朝鮮の土方。印度の水賣。ぼるとがるの屠
牛兒。米國の銀行家。佛蘭西の仕立屋、宣教師。倫
敦の土木請負。土耳其の雪車曳、馬車屋なんど、人
あれば火あり、火あれば雪あり、雪あれば風あり、
そして横町に一つ宛黒い波のある中に、和歌子の居
た丁ど鄰家に、猶太人の藥舗があつた。主人は陰氣
な、人の可さうな苦い顔した男で、五つばかりも
年増らしいが、容色の可い、目の鋭い女房が、星を
占ひ、禁厭をし、祈祷をする。神巫だ、魔法使ひだ
と風説した。十八九に成る娘が一人。色の白さと言
つたらぬ。別けて、黒髪を肩に流して、雪白の寝
衣姿、蒼い蠟燭を灯して寢室へ階子段を上るのが、
婦人の目にも悚然として美しかった。……其
の娘は日本長崎から傳來と稱へて、支那人から買つ
た、乙女、白玉とり／＼に、椿の鉢植を、吹雪の窓、
暖爐の燃ゆる火の傍に、眞珠の如く、紅玉の如く錘
愛した、――と言つて、近鄰のものに話す――

これを可懐むのであらう。居まはりでは、和歌子の、白衣で黒髪を垂れた装で縁の雨戸に、蠟燭の灯を照して、雨を見、蟲を聞くのを知ったのがある。此で、其の話の中の女の状も惚ばれて、尚ほ其にも勝らうと思ふのに、眞似にも事を缺いた、品にもこそよれ、神巫、魔法使の娘だと云ふ猶太をとめの闇のひそみに倣ふとは何事だらう。――これだけでも、其の性の知れない婦人であるのは言ふまでもない。斷るまでもなく、此の女は、町中に、唯一人住である。

錦木和歌子と云ふ優しい女文字の門札は、霞町、花政の大通りと家数八九軒、横へ曲つて商人交りの屋敷町の端を、路地を入つた突當りにある。すぐに鄰町からぐるりと塀を押し廻した檣ヶ原子爵の邸で、錦木の宿は、恰も其の裏庭の地尻めいた處に、窓から唯一重杉垣を隔つるのである。

夏のはじめ、町内へ小さな虹の立つたやうに、浮草の根を留めてより、以來、生立も素性も今もつて誰にも分らぬ。……名と容子で、はじめは、

知らないが、女優かな。やがて琴曲教授、と云ふ札
が出た。はゝあ生田流のお師匠さんだ。が、軒に風
鈴の音もせず。かはつて、つゞれさせ、秋の蟲の、
萬御仕立物所と成つた。しめたわと男どもが綻びを
切らして待つと、・・・女髪結。

最も人を驚かしたのは露西亞語研究所と言ふので
ある。然し、其のいづれにも、弟子も註文もあつた
らしい様子を聞かない。・・・勿論其の看板た
るや、衛生組合、大掃除済の札ぐらゐな大きさで、
紙切に記して貼つて置くので。

「豆腐屋さん　ー　油揚はあるかい。焼いたの
が欲いのよ。・・・一寸、天麩羅見たいなもん
だけれど、油揚は生ぢや不可いぢやないか。・・・
・・そんなものは無いツて・・・不自由だね。
焼豆腐を拵へるついでに、今度焼いて来ておくれな、
後生だから。」

成程、小婢も婆やも要るまい、　ー　飯などは
滅多に焚かないと言ふ。

麵麩と、大概はハム。サラダ。ハムが無ければ皿
サラダ。三日ぶりぐらゐ洗つた菜を積んで置いて、
簞の尖ではさめば濟む。食卓に一人類杖で凭かゝつ
て、手綺麗に麵麩を裂く。あとは紅茶か珈琲と云ふ
處を面倒だから硝子杯を持つて路地裏の共同水道へ
出て武藏の名水玉川を傾ける。もつと手輕なのは巻
蓑を横脚へに懷手でスツと出て、
「御鄰家の奥さん、硝子杯でも、茶碗でも。――
壊して了つたから。」

但し、工面のいゝ時は、朝から、てん屋もので酒
と知るべきもの也。で、其の舉動は空を飛ぶ鳥より
も自由である。が、地上に巣くふ人間は彼の女ばか
りでなく、魚もあり、獸もあり、別しては、妙な、
變な男と云ふ、頭の工合から、手足の恰好いづれ不
出来だけれども柄の違つたものが居る。何故か、何
う云ふわけだか屹と居る。其の如何なる種類の男が、
出入るかは、暫時、讀まるゝ方の想像に任せて置く。

唯、當日、和歌子が通街の花政から家に歸る時分
に、路地を入つてつ共同水道を前にした、其の錦木

のー 此の頃は圍碁指南と札を貼ったー
格子前に立つた男を紹介する・・・手織縞千筋
の布子に、紺小倉の帯、髪を角刈にして、片手に番
傘、中古の萌黄の風呂敷を、ぐにやり肩に掛けた、
背のひよろりと高い、にきびのふいた若いもの、生々
しいは顔ばかり、皺切つたる風俗。はてな、妖にし
て艶なる、主婦は、血の道の薬が知らず、持薬に八
ツ目鰻の乾ものを用ゐるか、と、不圖見て思はれぬ事
はない。が、然うでない。飯倉片町に老舗の質屋、
孫田屋六兵衛、孫六の年期ものゝ中に、正直と勤勉
を以て聞えた、子弟の模範者たるべき、二十二三の
年配が、然も名を佐兵衛と云ふ中手代、欽すべき、
二宮尊徳の崇拜家である。

風呂敷の空虚なのは、嘘をつかない象徴でなけれ
ば、質を持参したのでない。實は引奪りに來たので
ある。・・・此の機會を以て、棄利と云ふもの
を御存じない方々を祝福する。抑々棄利の所因たる
や、自分の衣服を損料で借りて、着たまゝそつくり
と剥がるゝのである。

時に、通街の花屋では、雨が未だ留まないから、持物はあるし、與四郎が和歌子を送る事に成つた。

「兄弟分だ、手前、背負つて行ねえ。」

言ふにや及ぶ、此小僧、悪戯の手があげたいから何でも背負ふ。木兎の籠を背中にゆらりと金網の紐を咽喉へ廻して、花政と書いた番傘をさし掛けた。

「お爺さん、然やうなら——一寸後見つきの

軽業だわね。今度招魂社へ出ませうか、喜代さん、

御鼻肩に。よ、」

と媚かしい掛聲で、軒下に引束ねた、南天の實の紅を、溝板越しに翻然と出る。裋より、引提げた牡丹が揺れて、濡地に映す淡い影。

「ほッほう。」 負けない小僧が、一本脚で身振

で跳ねると、ぷツと膨上つた木兎は、目でぴか／＼と圓い稻妻、森の祠を思はする、街樹の落葉がニツ

三ツ。

油のやうな道の時雨に、白木の駒下駄、撫肩の後
姿を、若衆も手を留めれば、爺様の腰も軒に伸びて
見送れば、曲角が何とか云ふ質屋の黒堀、少し坂に
成つてなぞへに低く打つた忍返しに、悪戯小僧の、
高々と上げて一つ廻した番傘が引かゝつて、雫をし
たゝか、袖をすぼめた、あの地摺なる牡丹の色が、
其の時寂しく青く見えた。

雨やゝ暗し。

「 茹出し餛飩 ー ー 」

質屋の手代は驚いた、こんなに肝を潰した事は嘗て無い。時雨の暮でも、まだ日の中なればこそ、路地を驅出したくらゐで、一ツ番傘で身構へて立直つた、が、夜で見よ、すぐに氣絶。

「お留守なのかな、御免なさいまし。」
 一度格子を開けて見たが、下駄が無い。平屋で淺間なのが、火の氣も無さうに冷え切つて居るので、名さへ篤實な佐兵衛であるから、丁寧に腰を屈めて、江一格子を潜つて出た。餘りずか／＼と城の門を入つたので、寂寞とした様子の不氣味らしさ、濱松の大手を武田の陣笠が窺ふ體で、出直して戸外から、もう一度、

「御免なさいまし、・・・・御免下さい。」
 勿論返事はない。

其の實、境木敏夫と云ふ、文展を落選した、何某學校出の、髪の長い、色の白い薄髯の生えた秀才の

兄にい哥さんが　ー　此これより前さき、留る守すへ入はいつて、待まち草く臥たれ
て、縁えん側がはつきの奥おくの六む疊かさねの眞ま中なかに、兀はげた一かん閑ばり張の
卓ちや子ぶ臺だいを小こ楯だてに取とり、薄うす搔か卷まきの天びろ鵝うど絨の襟えり、白おしろ粉いの
薰かと女をんな枕まくらの鬢びんの香かに、綿わたは落おちても、赫かつと温ほつて、
脊せいのたか高をこい男をとこだから紺こん足た袋びの足あしを裾すそへ突つき出だし、然しかも頭あたま
は引ひ被つかつて、馴なじ染みに振ふられた引ひけすぎほどに、目めも心こころ
も暗やみに成なつて、小こ庭にはの山さん茶せん花くわ、艶つやに出でて、時し雨ぐれの玉たま
水みづ櫃のきへ走はしる點した滴たりを、鄰となり家なりへ外それた上うは草ざう履りの音おとの思おもひ
で居ゐる處ところ。待まつ身みにふてた了れう簡けんには、恚かる折をりから男をとこ
の聲こゑは、劉りう備び玄げん徳とくでも、時ときの内ない閣かくの大だい臣じんでも嬉うれくな
い。況いはんや掛かけ取とりの米こめ屋や、薪まき屋や、もしそれ然しからならずんば
嫉ねたむべき鞞さや當あて筋すぢと、内ない證しやうを知しつて寝ねて待まつくららぬ要えう
害がいを心こころ得えて、棄すて利りの使し者やの佐さ兵へ衛ゑ如ごときに返へん事じをすべ
き若わか武む者しやでは無なかつたのであつた。

雨あめは冷つめし．．．．霞かすみ町ちやうに近ちかい處ところ、また出で直なすも
億おつ劫くわで、佐さ兵へ衛ゑは格かう子しまへ前へに、ひよろりと立たつて、所しょ
在ざいなさうにニすと、背せ戸どへ入はいる木き戸どがあつて、さ
すがにこの錦にしき木ゝの宿やどなれば、柱はしらも扉とひらも鏡かみ立みだての形かたちに
見みえる。が、熟じゆくした念ねん入いりの絲へちま瓜がが一つ、ぶらりと
下さつて、朝あさ顔がほの交まじつた葉はが枯かれ々々に葎むぐらに絡まとふ。一りん輪りん、

芥子ばかりに、後咲きのあはれを夕暮近く、薄淺葱
の、寒き、朝顔の花あり。……絲瓜を顔に枯
葉の衣で、其の朝顔が鉾に似た唯一の胸の寶玉、露
西亞の貴族が妖艶にして婀娜たる魔渡使のために、
骸骨に成つて、會堂の屋根に曝しもので、振ら下つ
た……とも見えれば、こゝに、胸に眞珠を含
んだ美術家が、和歌子の色香に、みいらに成つて、
忍ぶ垣根を魂の彷徨ひつゝある風情にも見える。

とも思ふまい。二宮佐兵衛が、薄ぼんやりの癖と
して、正直まつとう、傘は、傘は、開いてさすのが
色とも知らず、故と疊んで、石神に似た油紙の太い
棒にして、篤實に、両手で持直して、件の絲瓜の、
鈍な、佐野の馬の面めいた鼻頭を、トンと蜻蛉で突
上げた。

「はくしよん……」

唯、鬼瓦が蝙蝠を吸つたやうな、へんてこな嚏を
したと思ふと――魔はこんな時に魅すと聞く

――直傍の物置の戸が開いて、ひよいと顯れた
妖精一體……呀、これにこそ驚いて佐兵衛は

露地を驅出したれ、夜だと目を眩すのは此の事で。

また、物置と云ふのが、これも麻布だけに氣の知れない、七不思議にも算へよう。向つて格子と、並んだ其の木戸との間を横に切つた羽目板に、蜜柑箱を重ねて打着けた、と云ふ、粗末な設計。家ぐるみ、ぐるりと背を向けて、（千手觀音をがんでおくれ。）とアイ又出の巡禮が厨子を向けた形がある。――空地の無い切なさに、誰かゞ苦しませの經營であらう、が、それも雜道具あつての事――今度の借主に成つてからは、炭俵に三俵法師、おもなるものは紙屑を一杯に突込んだ、鼠の巢だか、犬小屋だか分らない。

傘の蜻蛉で噓を合圖に、辻堂の武者修行、裡から出たは、そも何等のものぞ。唯見る、身の丈三尺に足らず、（――あの、槓ヶ原子爵家に飼つて居る、仔細あつて町内界限迷惑な）――洋犬の背よりも低い侏儒、水掻の有りさうな小さな足、だぶ／＼と突出た腹は蝦蟇ほどある。頭の毛髪が耳を塞いで、然も、もやしの産毛めいて獸の膚に異なら

ず、頭がこけて、額が小さく、下膨れの頬ばかり浮腫を持つて黄色いのに、口がやがて耳たぶへ、唇の小皺をえぐツて、眉間に深い皺とゞもに、爺かと思れば童なり。血走つて眼が赤く、眉毛なし。瞼から兩の頬へ掛けて、てら／＼と赤膚に剥けたやうで、そしてギザ／＼の筋が入つて、粘を帯びて、じと／＼して、腐つた西瓜に髣髴な處へ、また嘘のやうに、頭の皿が兀げて居る

うまくない。恚う記しても、彼奴の形骸は寫されぬ。近頃は影をひそめて、字書を引いても想像的動物と成つて不都合な。近い處で荒川か、離れて印旛沼に居てさへくれゞば、二字で分る、河童。と同じ人間の、生々としたのである。

だらん、と兩袖の干切れかけた長い袖の、棒縞のどんつくを、青ざめた胸はだけに、裾をびしよ／＼に着て、汚れた綿心の出た、赤い腰紐を胸高に一ツ巻いて、尻に輪にして端をぶら下げたのが、大な絲瓜を横脚へにして嚙りながら、大正年間、世界に於ける大都會、東京麻布霞町の錦木の物置から、恐れ

多くも、天にまします基督に、仕掛けてバタリと樂屋から戸を開けさしたやうに出て、蚯蚓色した小さな手で、件の絲瓜を嚙り／＼、涎と水漬をだら／＼、濡れじとりの頬邊と、あの口を、一齊に赫とあけて、白い反齒で、ものをも言はず、ニヤリとして顔を視た。

顔を見られたのが、十五年奉公して質屋に成るのを夢にも忘れぬ、二宮の氏子、佐兵衛である。

「あッ。」

と、番傘で頤を支いて、胸を板の如くに反る處を、赤面の切禿が、鳥のやうな赤い指で、露地口を指して、

「うゝツ、うゝツ。」
「……涎をだら／＼と口を利いた。」

駈出さずば成るまい、姓は二宮、名は佐兵衛。
― 時に詰るものあり曰く、談者は、餘りに奇を語る。絲瓜が食へるか。答へて曰く、妖精ゆゑに嚙るにあらず、薩摩に於ける尊徳宗の信者は大名

と雖も絲瓜の清汁で七五三の祝に賓客を遇するのである。然うした向の説を聞け、冬瓜の葛かけ、病人でゴハンすか、何、芝蝦を入れると？ 腥臭。

駈出した佐兵衛は、しかし餘りの事に、番傘を握つて、退りながら、町から、露地の奥を覗き込むと、侏儒は雨の中で朦朧として、且つ消えず。油繪で塗つたやうに明かに正體を留めて、お刺に花政入道の其の如く、前屈みに腰を屈めながら、赤い指で、また指示する。・・・其の指で、操られた體に、ぼんやりと踵をまはして、佐兵衛が見遣つた町中の、早や其處へ、與四郎小僧のさしかざす、傘にも映る牡丹の影、友染捌き艶麗なり、羽織の黒も艶墨に、浮いて揚羽の蝶の紋。

「すて利だ、あれを剥ぐのだ。」と、一生懸命に念じながら今、來かゝる辻の紅殻塗の、こんな確なものはない、活きた血の通ふ世界を見つゝ、しかも、其の郵便箱を魔道の榜示杭のやうに思つたのである。

南無三寶、近くと、木兔を背負つた鴟梟小僧。
佐兵衛は横なぎを啖つて、ぼうと成つた。
が、確りなさい、二宮氏。なか／＼、こんな事ぐ
らゐでは濟まない。

「おや、お早う。」

晩方だのに――和歌子が莞爾。

「来たね、彦ちゃん、おい、彦六。」

きよとんととして顔を見た。が、媚かしい人の聲に、
性根が漸と戻つて心付いて、

「えへ、孫六の手代佐兵衛ですよ、彦六ではあ
りませんですよ。」と、眞面目なもの也。

「生意氣お云ひな、三途河の婆さんの、其の孫の
また使ひぢやないか、難有くお思ひ……彦な
ら結構、曾孫で澤山、眞個は細螺だあね。――

おいで、弾いて上げるから、――

と澄まして露地へ入るのを、背後から随きながら、
入口で立留つて、おつかな吃驚、侏儒を透かして覗

く。

一度、婀娜に細面で、眉も目も、くつきりと白く見向いて、

「おいでな。」

と、も一度莞爾した。が、唯振返つて、侏儒を見て、

「おや、芭蕉實、お河童、ハイカラだね、一寸。」

「うゝツ、うゝツ。」と、再び指す。

入り掛けた佐兵衛が又退つた。

「留守に來たツてんだらう。分つたよ、難有うよ。寂しがつたらう、其の代りね、お友だちを連れて來たよ。」

さすがの與四郎、一本脚で飛べもせず、これには恐れたらしく、羽目について横摺りに退下る。

其の背の籠を、トンと叩いた。早まつた――
連れて來たと云ふ友達は、木兎の事である。

河童^{かっぱ}は、
扱^{さて}は、
和歌子^{わかこ}が飼^かつて居^ゐる妖精^{ばけもの}らしい。

實は、此の秋の彼岸に、和歌子が雑司ヶ谷の方へ
 行くと云つて出掛けた。其の歸途に連れて歸つたも
 のである。

「御參詣でございますか。」……はじめ、
 訊く者は、殊勝な墓參だと思つた。

「否、花を摘みませうと思つて。」

黄昏に、炬火の如く、角の酒屋の店を赫と燃して
 町内へ入つて來たのが、（月見草もまだ咲残り、
 嫁菜の花、萩も思ふまゝの折からを、）雁來紅、
 せめて薊でもある事か、曼珠沙華？ で、そればか
 りを、薪木ほど束にして、あの異相醜惡な侏儒に背
 負はせて歸つた形は、可怪、狸の背に火を點して山
 姫が來たやうに見えた。

「變つたおもの好で。」

「はあ、まるツ切獨身なんですから、心細いんで
 すもの。不意に息を引取りました時のお線香がはり。」

冥途の炬火にするんです。」

あの、絲瓜の木戸にも五六本、床の間から手水鉢、小さな庭へもすく／＼と突挿して、當時は月夜に赤かった。……此の魔の火の灯れた中に、窈窕たるのが下髪で白衣で、蠟燭の燈で、赤爛れの面の侏儒と、卓子臺のお取膳。白丁から直接に硝子杯の冷酒を煽つて、サラダを突いた處は、此の世とまでは云ふまい。日本國にあるべき事とは思はれぬと、霞町にも、随分、婦人の嫌ひでない男は多いが、いづれも垣間見て舌を巻いた。

扨、露西亞の錦木塚とでも言ひさうな和歌子の宿へ来た、侏儒は、其の日、池袋から拾つて来たのだと言ふ。

甲武線の彼處で、其の曼珠沙華を引抱へて乗つた電車の中に、和歌子と鄰合つて、秋の彼岸と云ふのに絞の浴衣に、唐棧柄の古半纏、白い湯具の裾端折、脚絆に白足袋、日和下駄、剥貝絞の手拭を吉原被りにした、汚い風呂敷包みに片足を乗つけて、煙草を

飲んで居た、鼻の高い、目の
牙えた色の白い、眉
毛を落した大年増があつて、侏儒が、ちよん、と其
の肩へ腰を掛けた形に腰掛へ立つて、べろ／＼舌の
尖で、硝子窓を舐めながら、田畑を視め／＼、電車
の走るまゝに、ちよろ／＼と乗合の背中を潜つて腰
掛を傳つて歩いた

年増の風采が、淺草の馬場裏、新宿の追分邊から
出る女猿曳、古女房のおわんわん、蛇遣ひの口上言、
と云つた様子なれば、夜啼石の種小僧か、それとも
生のもので、千住大橋箔づきの見世物であらうと思
つた。――年増は成程新宿で下りた、が、河童
は瓢單ぶつくりこ、と乗換の電車へ又浮いて出て、
和歌子が、目黒で下りた時、後について一所に下り
た。が、手ぶらで何にも無い、ばけものゝ癖に尻尾
も無い、勿論、切符も持たぬ。

驛員が持餘して居るのを見て、和歌子が賃錢を償
ふと、うゝ、うゝ、と指を噛み噛みお叩頭をして、
附着いて後から来る。晩方で、野掛の遠出、持おも
りのした狐の蝋燭、曼珠沙華を背負はせると、ひよ

こノ、供をしたと言ふのである。

「お給金なし．．．．．こんなのでなくつちや遣ひ切れない．．．．．」

で、丁稚とも、居候とも、男妾ともつかず、其の日から居てついて、あの、物置にも寝れば、縁の下へも這入む。畳には固より勝手、臺所、屋根を這はないばかりの代もの。

言ふ事は解るらしい、何事も合點々々。

「うゝツ、うゝツ。」

が、口が利けない。．．．．．然うかと思ふと、七八歳の童形で居て、時々六七十ぐらゐの爺の聲を、前世で咽喉へ嵌込まれたやうに皺枯れた音を出す。恐らく魔界の蓄音器と云ふのであらう。

共同栓で、日向ぼツこで、河童獨吟す。

「油蟲が煩いわい、うゝツ、うゝツ。」

思おもひも掛かけず恚いかう云いつたり、……また耄ぼけた聲こゑで、

「姉あねさんやあ、そろ／＼水道すゐだうの水みづは冷つめたからうね

え。……井戸ゐどの水みづはね、冬ふゆは暖あたたかあいものだよ。
う。」

「きやつ、」と云いつて、ばけつを投なげ出して遁にげたのは、家いへ並びの官くわん吏りの令れい嬢ぢやう。

「小母をばさん。」

若わかい銀ぎん行かう員ゐんが、些ちと色いろ事ごとで、新しん世じ帯たいと云いふの臺だい所ところを覗のぞいて、小春こはる日に甲羅かぶらをほしの、悠い々うと踞しゃがみ込こんで、

「鮎このしろは魚ぎよ田でんが旨うまあい。——」

小鮎こあぢを焼やいてた、小母をばさんが、納なままらない、漸やっと二十はたちの御ご新造しんぞうさん。

時ときに、同番地どうばんちに草分くさわけと稱しやうする、娘むすめの時ときに高杉たうふう先生せんせいの顔かほを見みたことのある、長州萩ちやうしゅうはぎの土族しぞくで、野面のら聲こゑの大おほい、學がく校かう用よう具ぐ店てん、百ねん年だう堂だうのお婆おあさんを頭領とつりやうに、町ちやう

内連判で、河童退治を迫るべき筈の處、天の配劑奇なる哉、不出来しな上野の銅像も、棕鳥のためには、照降の天氣豫報に成るのである。

とも思へるし・・・悲觀すれば、獸と、鳥と、人間と、洪水と、地震と、飢饉と、戦争とが、相接近する前兆であらうも知れぬと思はれる・・・が、此の侏儒を、却つて町内で、祠に祭つて然るべき事が出来た。

他でもない。

榎ケ原子爵家に、やがて小牛ほどな黒の洋犬が一頭飼はれる。・・・館の姫様、三太夫、御門番に到るまで、此をばトーマスと呼ぶのである。が、面附のツぽで、圖體の大きい處から、居まはりの小兒からはじめて、頓馬々々、と呼びなす

ー 性質は頓馬だが舉動は猛虎の如しで、辻から唐突にぐわツと食ひつく。自轉車乗は引轉覆る、車夫は溝へ嵌る、自動車はぶう／＼唸る・・・ぬツと立つと大人より脊が高い、小兒は頤の下に挟

まれる。見境の無い事は、館の料理番さへ噛まれて
血塗ろに成つて玄關前へ打倒れたし、小間使が島田
鬚を啣へられて仰むけ様のちらし髪、羽織を破られ、
袖を裂かれて、使ひあるきの女中たち、ひい／＼悲
鳴を擧げる事近所に幾度なる事を知らず。申上げま
す、電話、はがき、管轄の警察へ注進櫛の齒を引
如し。で、獣醫が警官と出張する。出張する、が、
幾度検診に及んでも更に狂犬たる事を認めない。撲
殺思ひも寄らず、小塚原へも棄てられない。元來子
爵家の飼犬である。然も其の由緒を糺すと、時の内
閣、何某伯の官邸から、檜ヶ原家へ遣はされたので
ある。閣下と御前の御聲が、町人如きの言條が
通るべき所謂はない。

が、難有い事には、天に神明あり、地に明法あり。
夜ふけは何うやら鎖で繋がせる事にした。けれども
餘り窮命をさせると、却つて狂犬に成る恐れがある
とて、手加減で、午後の十時を過ぎると解放。さるゝ
が否や、暗の黒犬、月夜の灰虎、塀の蔭から、垣の
下から。

キヤツ、キヤツと町内、けたゝましい男女の聲々。

狂犬でないのに、何が故に人を噛む歟。曰く、トー

マス饑餓たれば也矣である。――草分の説による

と、はじめ大臣閣下から、當所の御前へ、婿入

(男犬) 當時は、溫柔羊の如きものであつ

た。……が、澤庵の尻尾に冷飯ばかり。トー

マスは薪屋の炭俵を噛み、やがて薪雜棒を噛つた。

床屋の店へ入つて、べろりと散髪の毛を甜めた。中

にも女の脱毛を漁つて、ともすると、長い髪の毛を

横啣へにして、然も甘さうにしゃぶつて、のそつく。

そんな時は、あはれなるより寧ろ凄い。

――病ではないが、空腹のゆゑに人を噛むのだ、

と言ふのである。

子爵家の御手飼が餓しいなどゝ、馬鹿を申

せ、……そんな事は、警察で御存じない、勿

論、派出所に於てお取上げに相成らぬ。

惨憺たるものは夜遊びの男どもで、漸と工面の出

来たのは俾で歸る。……勘定ぎり／＼のなんぞは、早や花政の通街の角から、疑心黒犬を生じて、圖の悪さは、洋服で立竈んで酔も醒め果て、せめて電信の配達夫、とばかり待合せ。よく／＼困ると、もり蕎麥を誂へて出前持と一所に、こツ／＼。

氣の毒なより可笑いのは、夜、錢湯に行く女連で、向三軒、兩隣。今晚は、今晚で誘ひ連れる。

……こゝに一人、陸軍中尉の令夫人、洋杖を支いて先陣を承り、令嬢、御新造さん。百年堂の婆さんが同じく洋杖の殿で、上總と房州のお三どのが兩翼に備を立て、長蛇、鶴翼、車が／＼。

「わゝわん／＼。」

あれ、きやあ、と悲鳴で散る、と、お婆さんが夢中で、曳と長刀の大上段。

唯見ると、其の洋杖の持主なる、早稻田の商科へ行く、脊高の其の一人息子。

串戲ではない、實は泣くより笑であつた。

處を……天の配劑である——

四邊、八方、トーマスの長面が、胴を畝らして、處嫌はず顯れると見ると、塀の暗、門の月、何處からでも、侏儒がちよる／＼と出て來て、うゝ、と吠えるのにうゝ、と合せて、這奴餓虎の胴中へ、横抱きに抱ついて、背中へ、うつむけと成つて、ぴたりと乗る、と、其のまゝ頓馬が、ぐな／＼と萎えて、赤い頬邊を嘗めながら、載せつゝのツそり町に行く。是即、河童太子、玄車に乗り、鐵驪に駕し、黒旗を建て、暗夜を駛る

……可怪き額の抜繪である。

和歌子が湯歸りの薄化粧なぞで、唯出會すと、其の天邊の皿を、雪のやうな手でポンと叩いて、

「お河童や。」

近所の手前、河童は餘り露骨だとして、上へ（お）の字を付けて呼ぶ……

「
夜遊よあそ
びかい、
・
・
・
・
・
浮氣うはき
もの
・
・
・
・
・
」

「手前より俺の方が驚かい。ものの五町とは有るめえ、一跨ぎの使が、もうやがてこれ二時だ。」

花政の爺様は、奥の六疊に、夜は樂隠居、寝々衣で、とつちりと膳の前。ちろりの爛、。黄鮪の中脂、時雨に通ふちり鍋にも事は缺かぬが、老年の冥加と、先づ／＼手製のなめものをして行る處。

「悪戯にも、なまけるにも、ものには度と云ふものがあら・・・馬鹿も手前ぐれえに成ると、呆れが宙返りをして下腹が擦つてえ、な、たとへば此だ。」

と、火鉢の傍へ突出したは紅白の水引のしめ高で、朝比奈が床几に掛つたと云ふ進物也。

「雑と端書ほどある名札を拜め。子爵榎原家執事、近藤友英と・・・あゝ、實に勿體ねえ、花政風情へ、紋着羽織御袴で御上使だ。先刻奥方様に御用

立て申上げた傘が御返禮だ。中味を何だと思ふ。藁半紙九枚、九枚九枚、と云つても同じ事よ。半死半生と云ふ洒落は聞いたが、こいつは九死一生

だ。……ものには度と云ふのがある。呆れが宙返りたあ此だぜ。金銀張分のきらびやかなる處の御袱紗が掛つて、白木の臺附。袱紗と臺は下さるんぢやねえ。腹切刀の九寸五分でも御返上申すのだ。此奴を頂戴に及んで、舐めて取つたなあ大星由良之助ばかりだと思へ。――また此下されものを取次いだ内のお光と云ふ奴が、何と、目八分に据ゑて、俺がな、此の爛鋤釐へ手を掛けた處へ持出すのに、摺足で、テトドン／＼と言やあがる。彼奴も不出來な江戸兒だ、そんな了簡方ぢやあ、

と口を大きく開けて、臺所に、嫁のお久と云ふの一所に、肴の二番手を見せようと小まめに働いて居る娘の方を透かして見て、フト低聲で、

「な、碌な婿は持ちやあがるめえ……俺あ、もう此の年紀だから仔細はねえが、恚う成ると口よりの手の方だ、水を浴びせるより火を放ける方が疾え

のよ……ものによあ度と云ふのがある。」

其の癖、叱言の口よりも爺様はちろり酒の酔が廻つて居て、

「よく、手前、店へ入る處を天秤棒で向脛を打挫かれずに助かつたな。」

仰にや及ぶべき。

「怪我をしてよ、眞個に——」……お光の情で、天秤棒は、高箒とかはつたが、喜代吉は手ぐすねを引いて軒に夕荷の着いた、菊を積んだ花車の蔭にかくれて、手ぐすねを曳いた。——和歌子を送つて三時間強、とツぶり日が暮れてから、其の横町の角へ、與四郎の浪花節……降り来る雪に赤合羽、赤垣源藏武重が（此の義士の名のり誤謬なるべし、少時小僧の口ずさみに倣ふ。）と聞え出した時である。

「ほッほう。」

小僧は一本脚で、ひよいと飛んで耳へ兩手で木兔

の影五尺。

「此ン畜生。……」が後手に成つて、高
第の柄が流れる。店の敷居を刎越して、突然奥の隠
居の前に、倒に成つて叩頭した。手も附けられない
次第なのであつた。

「な、但し少々痛えぐれえで性根の附く野郎ぢや
ねえ、一番は斷食だ。晩飯片餉、處置をして遣らう
と思へば、天麩羅蕎麥を四杯御馳走に成つて來たと
言やあがる。食はせも食はせた、啖ひも啖つた。天
道是か、非か、と言ひてえや。——お光坊や、
お銚子のかはりめだ。」

「嫂さん。……何うでせう。」
と嫂のお久に、お光が小聲の壁訴訟。
……

「お爺さん、そんなに、可い事。」
花政又た、もんぐりと口を開けて、

「天道是か、非か、黙つて持つて來な。酒だと思
ふめえ、與四に説教のお茶湯だ。大和尚、然も禪坊
主如意でくらはせる、と云ふ豪いのだ。」

と大な聲して、

「で、何か、あの、別嬪が裸體に成つたか。」
と首を掉つて、音の調子を掠らせる。

「へい、内のお光さんのやうな、緋縮緬の、あの。」

「そんな事は何うでも可い。で、何か、質屋の使えに渡した譯かな。」

「へい、（そツくり持つといで。）然う云つて、お乳も、胸も、白薔薇の花見たやうなんです。」
と與四郎は、露出た膝小僧を坐直して、せい／＼と胸を撫でる。

「あの、姫様々々としたのがな。」

「だもんですから、質屋が驚いたんで。へい私も驚いたんです。」

「俺だつて、驚かい。……光坊や、お手が鳴るよ。」と、火鉢の縁を雁首でごつんと敲く。

「私だつて、驚くことよ。」
與四郎がもぢ／＼と、膝で、ずり下る傍へ、お光が来てちろりを掛ける。

「まだ、其のくらゐな事ぢやございません。
衣服を脱ぎますとね、お爺さん、いきなりそれで以て、其處に敷いた掻卷の中へ、肩まで、すぼりと潜つたんです。私はお嬢さんだと思つてましたが、あの錦木さんは奥さんなんでございませう。」

花政入道瞬をした。

「何は、お酌はよし、……臺所へ引退ん

「一寸、何の話？ 父爺さん。」

「叱言だ。叱言を傍で聞くと耳が押立つ。」

「可厭な、木兎ぢやあるまいし。」

「其のかはり、目が附着いて睡く成る。おかぶさ

な。」

「知らないわ、そんな事を言ふんなら、かくやを刻して上げないから可い。」

「その、其處で又口が尖る。……此の、うけ口と云ふのは張出しの美人の部だが、お前のは尖つてるんだ。」

「知らない。」と、トンと立つ。

「温習なよ……此處の合方は、一條戻橋な」と云ふのが可からう。――で、何したんだな、與四。」

「奥さんが、あの何でございます、（おゝ、寒い。）然う云つて、搔卷の中へ入つたんで、驚いて中からむツくり、男の人が起上つたんです、へい。」

「どんな野郎だい。」

「野郎ですか、何ですか、髪の毛のもじやノと長い、鼻の高い人なんです。」

「髪の毛が、もじゃ／＼と長い、鼻の高い、ふん。あの女が、はてな／＼、．．．ふん、いづれ變つた男ではある。」と、酒の呼吸に似ない、老耄れたものの言ひやう。

「奥さんは搔卷を引被りますし、其の人がむつくり出て、卓子臺へ、髪をばらりと遣つて、あの頬杖を支いたもんですから、其の質屋の若衆が吃驚して、．．．座敷の入口で、奥さんが上下脱いだ衣服を．．．」

畳を撫で／＼、

「あの、恚うやつて、袖畳みにしい／＼居たんですが、長襦袢ごと引抱へて、風呂敷にも包まないで、格子から駈出しました。．．．私は、木兎の籠を持つて木戸から入つて、庭で、縁側の處から見ました。へい、質屋が露地の羽目へ衝突かりさうにして遁げたんです。」

「與四公、其處だ！ な、ものは等閑に見るなよ。これ、話の河童小僧なり、別嬪が素搔卷なり、娑婆

の事とは思はれねえ。不意に出會して見る、火がかりの馬連に火がついたよりか、此の俺だつて目が眩ばい。――處を、逃げるのに衣類一襲を持つて駈出したは豪い。講釋では、臣として四方に使用君命を辱めずと言ふのだ。然う云ふ若衆が、後年出世をする、やがて帳尻を預からうと言ふものだ。手前などは眞似も出来ぬえ。あゝ、さすがは飯倉の辻の角屋敷を張る親質の御大家だ。いゝ奉公人が居なざるの。――と、酔が廻ると、少しづる／＼と成る癖あり。爺様の獨り頷く形は、娘が冠を振るのに似て居る。入道にして此の言あり、佐兵衛知己あり、で、二宮氏以て瞑すべし、と思ふと、與四郎が上目で見て、一寸うつむき、擦つたい顔をして、

「ですが、あの、何ですか、利息を持つてくのを忘れて駈出したんですつて。」

「何！ 棄利の金をな、はてな。」

「七月分――（まあ助かつた。）つて、奥さんが、素肌搔卷の襟を合はせて、くるりと起きましたんですよ。」

「あゝ、天道是か、非かい。」と横向きに成つ

て、入道方丈眉の白いのを、天井高く、煤を拂つて
憮然とす。

「そして、あは／＼、男の人も笑ふんです。」

「天狗笑と云ふ奴だな、可恐い、化もの屋敷だ。」

はて、御維新前、此の山の手邊土の惡旗本、御家人
の屋敷には、得て然う云ふ素披抜きすつばぬの町人泣かせが
あつたもんよ。然うした邸には、得て今以てあかず
の間と稱へるのがある。――怪もの序に、其の
河童小僧は何うしたな。」

「火の氣が無いんですから、奥さんのいひつけで、
あの臺所の隅に踞み込んで、七輪へ起すツて、あの、
曼珠沙華の枯れた莖を焚附にして、燐寸で古新聞を
燃したんです。」

「何、其の樽柿面の小僧が、臺所の隅で、七輪
で……燃したとえ。いづれ、青い火が、めら
／＼とな。あゝ、以前、此の、川施餓鬼の後ぢや大
川筋へ、そんな亡靈が顯れて、筏乗が腰を抜かした
ものよな……」

と兩の頬を窪ませて、縁を鎖した障子を視めて、
「まだ、止まねえ、雨は降る。愈々以て尋常ごと
でねえ。其處で、手前、天麩羅蕎麥か、いづれ、蚯
蚓ではある・・・」
とまた老いたことを言ひながら、ちりの汁を、ひ
たりと一口。

「此とても、さて鯛でなし、鰻でなし、魴魴
だ、・・・天道是か非かい、與四公。」と大
な聲。

「否、貝や、魴魴ぢやありません、天麩羅は蝦で
ございました。」
花政苦笑して、
「天道是か、非かい。分つたよ、だが、くらひも
食つた、が、四ツとは驕つたよ。」

「え、其の驕なんですけれど、奥さんに工面が
着かないんです。木兎でさへ牛肉を食べてるのに、
ー 私が頬張らして居たんですー（恚う
四ツ顔を揃へて、）ツて、錦木さんが・・・」

「四個と……待ちな、河童を入れてだ、手前も其の面の一個だな。」

「へい、一個です。」

「威張つてやがる、天道是非とも行かねえや、弱らせる。」と、今度はなめもの。

「……一寸、金入をお出し。」奥さん

が、其の男の人の袂から引張り出して見ましたつけ。

（まあ、入ものばかり紅革で、中は何だい、電賃が漸とだね。）ツて、がちやりと縁側へ投出して

（小僧さん、お使賃。其のいれものだけだよ、中味はお約束した月賦だよ。）然う云つて、あ

の……」

と、膝頭を撫で、押立尻で、井へ手を突込む。

「待ちな、此處で木の葉になんぞなられちや、鼠が天井から煤を落す。――何うだ、……」
牡丹は活けたか。」

さすがは月三齋、本性違はず。

「それは、あの、手水鉢に突込みました。」

「や、假にもせよ、あゝ然う云ふのだ、工面がいゝ
と、香水を流込んで、牛の乳で行水をするとき・・・
・・光やが、此の頃活動寫眞の口上で聞いて来た。
唐天竺の女にあるとな、提婆達多のお妾だ。」と、
つまを利かして、黄鮪をつるり。

與四郎は自ら號した、天麩羅四杯の腹中なれば、
今夜ばかりは刺身も羹汁も閑却した顔色で、

「木兎の、その、木兎の何だツて云ふんです、牛肉に對しても、四人揃つて何にも飲食をしないでは、水を吸つてる牡丹の花にだつて極りが悪いツて、また奥さんが然う云つて、ですけれども、酒屋から煙草屋仕出屋、蕎麥屋、八方塞りで何處だつて貸さないし

貴下は空懷だし……奥さんが云ふんです。

髪の毛の長い人は弱りましたね、頭を搔いて叩頭をしたんで。其から奥さんが、火の起りかけた七輪を卓子臺の上へのつけて、搔卷の袖から、白い手を出して當つて居て、いきなり袖を敲いて莞爾して、
(いゝ事がある、河童の見せものを拵へて些とばかり小遣を拵へる。丁ど可い、しよぼ／＼雨に酒を買ひに行く形に誂へよう。)(頭へ被せるに借りて

歸つた番傘ぢや配合が悪い。杉葉が可からう。)
と男の人が言ひますとね。其の杉葉が不可いんです
つて。――

あの、彼家の竹垣の外が、すぐに、裏町の檜原ツ
てお邸で、境に杉垣がある。いつか、餘り騒ぐから
鼠の穴を塞がうと思つて奥さんが、其でも黙然ぢや
よくなからうと、あの、お邸の小間使が、二人では
しものを取込んでるのに、垣根越で、二葉三葉杉の
葉を頂きます、と念のため斷つたら、その、何で
す、……お待ち遊ばせお、お上へ伺ひを立て
ますから、――然う云つて一人が駆込むと、其
の一人が残つて見張つてたんですつてさ。

すると、あの少時すると、被布の肩で風を切つて
反身で、頤と眉間で見當をつけて、お邸の奥方様が
お立出で遊ばされて、垣根の處で、袖から眼鏡を出
して、ぎら／＼と光らせて、上下左右を見廻いて、
其の、（其のな、枯れた葉、枯れ葉。）とおつ
しやると、鋏を持つてついで来た小間使が、ちよき
り／＼、それを垣の上から、ぼとん／＼、ばさり／

だぜ、ふん、それで……」

「跣足です、胡蘿蔔見たいな空脛を端折りましてね、貧乏徳利を振下げて、河童も可笑いんだか、二ヤリノ、露地を出ると、あの、黒い處へ、水仙と菊の花を彩色した柔い搔卷を素肌へきたなり、褌を取つて、錦木さんが、（舞臺飾だ。）然う云つて、先刻の牡丹の花を持つて、あとから露地口へ出かけたんです。」

「やれノ、天道是か非かい。」と少し開かつた襟を合せ、其の癖乗出す。

「河童が、前町を横ツちよに、あの、越長（酒）店を云ふ。）の方へ行かうとすると、奥さんが牡丹の枝の眞中を取つて、スウと指して、（づつと一廻りして……）然う云つたもんですから、逆戻りをして、びしよノ、びしよノ、郵便箱の處まで。それから、又しよびたれノ、びしよノ、歩出す。——知つて、も薄氣味が悪いんでずぜ。犬より小さい、古鼠が立つて行くくらゐにしか見えねえんで。」

（ありツたけの聲をお出しな、口上を頼むわ、旨いんだらう。） 錦木さんが私に云ふんで。旨いもんですぜ、へい、私あ。東西、東西、東西、東西！」

「金切聲を出すな、馬鹿野郎、店のものは、俺が叱言最中だと思つてらい。」

「え、御覧なさい箸、火吹竹ツ、晩のお支度お忙しうはござりませうなれども、御町内は御總客様、御覧なさい箸、火吹竹ツ、河童川渡り欄干づたひ、酒屋へ三里豆腐屋へ二里、姉さん、お若い、小僧は七ツだ、――何でも出たらめに喚いたんで。皆出ました。軒下やら格子前から、窓から三つも顔が覗くやら、往來が立留る。……（木戸錢木戸錢。）と錦木さんが牡丹の花で、美しい呪もんを稱へたもんですから、お立合魔法にかゝつて、……え、集めに歩いた私の手へ、ザクノと入つたんで、中にや五十錢銀貨が交つたんです。」

「發奮んだ奴だな。」

「私だつて發奮みたうございました。河童より、

をんな
女の太夫が、へい、」

「黙つて饒舌んなよ、ふん、さて／＼……………」

「巡查が来ました、へい、丁ど交番のが通りかゝつたんですね。」

「然もあらう、天の然らしむる處だな。いづれか鬼のすみかなるべき、とあるわい。…………大目玉を食つたか。」

「否、畠山さん、」

「知つてる巡查か。」

「重忠様です。」

「怯かすない、此の野郎。」

「雨の外套の下から、洋刀を光らして、傍へも来ないで向側から、……………残りお轉婆が過ぎはせんですかあ……………」

「はてな。」

「錦木さんが、内のお光さんのやうな柔い聲で、（はい、）……………云つてね、莞爾して、羽目の方へ顔を横に向けけますとね、それなり、あの、」

ぼくり／＼と靴が郵便箱の角を曲つて了ひました。」

「以前、權十郎と云ふ役處だ。成程な。」

「此方より、近所の人たちが、極りが悪いかして引込んだんです。―― 巡査の叱言には然うして莞爾したゞけですが、私が酒屋へ勘定しに行つて歸つて来る、と、錦木さんは何うしたんだか、搔卷の天鷲絨の襟から、頸を白うさげて、うつむいて、牡丹を見て泣いて居ました。」

「何。」

「廂合の雨垂落で、雨水がちよろ／＼と流れたのは、牡丹の色が、あの、雲切れの、白い空、薄赤い雲のやうに映ると、そればかり明るく見えて、もう暮れかゝつて、やつぱり、しよぼ／＼降つてるんです。―― 歸つて来た河童が、其の袖の下へ附着いて、じろりと顔を見ましたから、何だか露地が小川の流で、美しい夫人を河童が引張つて行くやうでございませう。可厭に心細くつて、寂いんです。――

然うすると、チ、チ、と宿餌がすんで、絲の

やうな聲で、雀の親子、旦那と女房とが、おやすみ、おやすみ言つてるのが――夢見たやうに聞えるんです。」

「其處だけしをらしいや、與四、手前も片親ねえ奴だ。」

ほろりとして、横を見て、

「で、何うしたよ。」

「雀が鳴くと、然うやつてた奥さんの顔が暗く成つたんですが、家から、男の人が、づか／＼出て来て、いきなり、天鷲絨の襟へ手を掛けて抱くやうにして、而して、錦木さんの手を握つて、
・
・
・

「此奴は、困らせる。」

「否、ですが、其の人も泣いてるんで。」

「はて、分らねえ。」

「然うするかと思ふと、奥さんが、其の手を拂ひのけると、とんと羽目板へ掌を、這らして、蹠跟けようとしたんですが、急に、其の、威勢よく、

（お河童御苦勞。） 然う云つて、牡丹の枝で河童の皿をトンと敲いて、（與四公。） すぐに私を呼ぶんで、もう、ちゃんと名を知つてまさ。」

「其處が魔ものよ、・・・な、狐、狸、天狗をはじめ魔性のものは、直ぐに人間の名を覺える、」

「えゝ。」 と、怯えた顔をする。

「うんや、驚かすんぢやねえ、何また、手前が魔ものなんぞに驚く風かい。」

「お爺さん。」

「何だよ。」

「野暮と化ものは、箱根から此方には居ませんさうですね。」 と、まじりと言ふ。

「な、其かはり、何うかすると、其の別嬪のやうなのが居るのよ。で、與四公何だと言つたよ。」

「夫人がね、（與四公、先刻の、あのー」

「わアかア」 最う一度私の名を呼んで御覽。」

と言つたんです。えへ、更まつちや出ませんや。

(よ。) 催促をされると尚ほ不可ませんや。そのかはり、ほッほう、遣りましたぜ、え、木兎が家の奥で鳴いたんです、木戸の處に眼玉がびか／＼。

「大袈裟だいい。」

「ですが、然う思へるほど、格子も木戸も暗いんで、まだ電燈を点けちやありません。木兎が鳴くと夫人が、(あら、お婿さん一人ぼっち、) てツて、威勢よく羽目板を傳ふんですが、それが、あの手指りで、・・・男の人が手を曳くの、可い／＼ツて言ひましたつけ。搔卷着たのが悄乎するほど、容子が滅入つて、お爺さん、」

「え。」

「錦木さん盲目ですよ。」と、目をまるくして言つたのである。――」

「馬鹿を言へ。」

「否、晝間は何ともないんです。日が暮れると、
と言も終らず、爺様は胸を拍つて、
「南無三寶、雀盲だな、雀盲かい、あの人が、お
や／＼、」

と、吻と溜息。急に、ぶる／＼と頭を振つて、
「あゝ、雀盲は治るよ、雀盲は治るよ。」

「治るんですつて、――ですから、男の人
酒を飲みながら言つたんです。丁と醫師へ掛らなく
つちや不可いつて――夫人がね、お爺さん、
（然うすると、長い間何でも醫師の言ふ事を肯いて、
あれをしちや成らない、慙うしてはよくない、何一
つ自分勝手な我儘が出来ないから可厭だ。また言ふ
ことを守らなけりや療治をしても役に立たなからう
し、病氣を治すためにだつて、人の言ふ通りにや成
りたくない。其のくらゐなら宵から寝て居ると思へ
ば濟む。）――然う云ふんです。」

そして、御酒は自分で飲みますけれども、天麩羅
なんざ男の膝に凭掛つて、仰向いて養つて貰つて、

あゝ、旨しいつて、」

と、うつかりしたやうに口の端を撫でる、と爺様は、への字の皺に唇を引結んで、

「あゝ、言ふ事、爲す事、魔ものゝ所爲だ。やい、與四、決して眞人間の仕業と思ふな。で、誰にも饒舌るめえぜ。しかし氣の毒だ。いづれ親がねえんだらう。な、與四、人間として附合つちやよくねえが手前は當分、半分木兎の乗憑つてる身體だから、其の木兎の羽だよ。夜分なんざ又飛歩行の使えや、また用ぐれえは足して遣ねえ。――海は廣いや、鯨も棲めば人魚も居る、半分人間の別嬪だけに、あいつの裸體は寒さうだ。」

と手酌の、ちろり。で、時雨に寝々衣の襟を合はす、――臺所では、かくやの音。

「眞個の事かね、全體、槇原家の御沙汰とあつて、右の別嬪に店立を啖はせたと云ふのは。何うですが、え、越長さん。」

越中屋長助、（錦木の宿から、時雨の夕、河童が徳利を提げて行つた、越長と云ふ酒屋。）は同番地の差配をして居る。――こゝへ、花政入道が一晩夜食過ぎの、中位を機嫌で、杖は支かぬが、後手を組んで、のこ／＼もの、やつとこなと、頭で燕の巢の下を潜つて入つた、服装は印半纏でも、表店の大隠居。

めくら縞の鯉口、淺黄木綿三幅の前掛で、目が、くしや／＼、燐寸を擦つても嚏の出さうな顔して、稼ぐ一方、律義、千萬な、越中屋の長助。若いもの小僧、五六人使ひながら、酒、醤油の量計の手加減、へい、入らつしやい、と自分で飛出す氣構で、帳場格子へ坐りもやらず、夜だと云ふのに押立尻して客を眼張つて居たのが、慌てゝ飛上つて、帳場へ、先

づ、と請ずると、花政が又上りはしないので、樽を引いた矢大臣、腰を極めると折込んだ胸が据つて、洞ヶ峠の床几に掛つた、筒井順慶、天が下の日和を見る面構。唯一つばく／＼の唇を嘗めた處は、自分で利酒の下備へ、少くとも四割一樽と思ふと、然うでない。

言はれた事は唐突だったが、返事に差支へる事ではなかつた。低い聲の、爽ならぬもの言ひで、

「え、其の店だて、と申すと穩でございませんがな、御邸の方に、少々餘儀ない事情がございますので、」

「いづれさ、事情がなくては成らねえ、店賃の滞りなんぞでがせう。」と云ふ、爺さんの頸には財布の紐が緩やかに掛つて居た。

「尤も、店賃の處もございます、が、それは、お邸様で一時お立てかへに成つても可、其上に、引越料と云ふやうなものも相當に出して遣らう、と恚

うまで仰有るんでございましてな、へい。」

「確か、此の邊の家作は、こりや榎原の**無**いのでがしたね、……越長さんは御**差配**だ。」

「へい、届きませんが、**差配**で。家作は持主が違ひます、が、地所はすべて御邸様のもの。と申したやうな譯で。」

「然れば、地主にしろ、別な家作ぬしの方へ、借家人の店賃を立替へて、引越料まで出さうと言ふ、これがそれ、他のお大名なら、陽氣の加減で、道樂になさるめえものでもねえがね。町内に**火事**がありや、消防夫が樋を伏せて一燭りお迎へ申さうと云ふ邸でがさ、越長さんの前だがね。それが店賃、引越料とまで**氣張**つたのは、何う云ふもんでがすえ。」

「**其**がね、御隠居さん、容易なりませ**ん事情**なの

で、
「はてな。」

「御邸様は唯今の御住居は、彼は確か一昨年あたり御新築に成りましたので、根岸には舊御殿、今では御控邸でございますが、其の、貴老、御殿から御前と御一所に、否もし、御前同様にお引移りに成りました、御先祖代々、中興の城の御天守にお据申上げたと云ふ、お人形様が御一體。」

と謹んで、まじりと言ふ。と隠居が引掴みさうに大な握拳を前へ突出し、肱を張つて、

「はあ、木偶が一個だ。」

越中屋長助は苦い顔して、

「否もし、榎原様御代々の靈魂とも申すほどの、大切な御人形で、白菊様と申します。」

「はゝあ、えゝ白菊……名告を上げた處では、こりや、雌だね。」

「飛でもない、へゝゝ、御隠居、御串戯ばかり。雌雄などと、御勿體も無い事で。——えゝ、と申しますのが、至つての御秘密でございましたな。」

御邸おやしきの御家來衆ごけらいしゅうはじめ、なか／＼御姿おすがたは拜をがまれませ
ん。従したがつて、女體男體にょたいなんたいとも存ぞんじたものはないのださ
うで、と申まをしますが、御邸おやしきでは御前様ごぜんさま、若殿様わかとのさま、
その他そ、家令かれい家扶御男子かふごだんしの方は、其そのお人形様にんぎやうさまを唯たゞ
今いまお話しはないたしましたつけ、「雲井様くもめさま。」と申まを
されますが、奥方様おくがたさま、姫様ひいさま、お小間使方こまづかひがた、すべてお
女中ぢよちゆうは、「白菊様しらぎくさま。白菊様しらぎくさま。」とおつしやる掟おきて
で、同じ御人形おにんぎやうに、申まをし方が兩様りやうやうでございますくら
ゐで、御本體ごほんたいは分わかりません。何なにしろ、豊臣とよとみ、徳川家とくがは、
足利あしか、そんなものではございませぬ。源平藤橘げんぺいとつきつと申まを
す、あの、藤原時代ふちはらしだいからの御姿おすがただと風説うはさをします、
御奥おおくの別殿べつでん、お人拂ひとばらひで御据おすゑ申まをしてありますさう
で。

但たゞ、御前立おまへたち、御齊眉おかしづきの若衆人形わかしゆにんぎやう、此これは人ひとも皆みな知しつ
てございます。それ以もつても、お出入でいりぐらゐの町人ちやうじん
には拜をがめませんが、御客おきやく、御家衆おいへしゆ、誰方どなたも御承知ごしやうちで。
え、霧之助殿きりのすけどのと申まをす、前髪立まへがみたちの、眉まゆのき
りゝとした、目めの清すしやかな美しいうつくしい、それは凜々りんし
い。黒羽二重くろはぶたへの紋着もんつき萌黄瀧もえぎたき縞しまの袴はかまで、脇差わきざし、と申まを
のが、此これが趣おもむきの變かはりました事は、黄金こがねづくりの小太こだ

刀ださうでございましてな。」

入道、上胡坐の片脛を落して、腕を拱いて、

「はて……此奴は些と價値さうだね。」

「御勿體も無いことばかり、へへ。此の御若衆と
てもでございます。お小間使如きが手も觸る次第に
は相成りません、夏冬、時々のお召替も、御本尊同
様に、御邸の、何でも總領のお姫様がお手づから、
召せ脱がせをおさせ申す定ださうで、御代々。へい、
尤も姫様が、おあんなさらなければ、奥方様のおかゝ
り、此は申すまでもございませぬ。」

で、此がためには、海を越して、貴方様、北海道
の王、と申す、大鉦鑛山の持ぬしへ御縁附でおいで
なさいます、御姫様が雛、菊の、節句ごとには、故
と遙々お立戻りで以て、お装束をお更めに成ります
くらゐ。其の砌は、お姫様、さげ髪白無垢、緋のお
下襲ね、と云ふ清らかなお美しい姿で、別室に矢張
り、お人拂ひの上ださうでございます。——夏
冬のお召替、御代々一度でも此が等閑に成りませう
なら、忽ち、……えへ、白菊様。」御

機嫌が損じて、御邸には、火難、盗難、劍難、水難、） なか／＼病煩ひ處では納まりが附きませぬさうで、事も容易なりませんやうな次第で、・・・既に先頃、此の九月にも、姫様が右のお立戻りで、其のお儀式が相濟みましたばかりなのでございましてな。」

花政入道、天井むきに目を瞑つて、

「入費は　　一　　婿持でがすね。」　「はあ、と、唐突で些と解し兼る。」

「否さ、榎原の事だ。総領娘が北海道から往復の入費などはさ、孰れ婿の方で背負でがせうね。」

「はあ、其邊は何とも手前心得ませぬが、何しろ、事も容易なりませぬ次第で、尤も御縁組以前から、此の儀は、堅い御契約と承つて居りますよ、へい。」

「先祖の靈魂だと言ふんだ。大名の先祖はいづれ木偶ではがあせんよ・・・家の掟だ、それだけ

は感心だね。尤もさ、火難、盗難、水難、劍難で怯
かさねえぢや、白無垢を引いても疊が摺れるなど、
言ひ兼ねめえがね、其は可うがさ。いや、お話は成
程と思ふがね、越長さん。それが何だつて又別嬪の
店だてにかゝり合があるんでがすえ。」

「其處でございますよ、御隠居、御総領の姫様が
御婚禮の砌り、然うした御約束がございますと
然に、御邸様で、此の地所をお貸下げに成ります時、
借ぬしへ御内意には、建てた家作の中へは、一人缺
たりとも盲人を住せてくれるなでございます。」

「盲目を……はてな、」
と前屈みに、腕組のまゝ頭を乗出し、
「一人たりとも……尤も、按摩の缺と言ふ
のは、つひぞ無えがね、はゝはゝゝ。」
越長も苦笑した。

「へゝゝ、と申すうちにも、男の按摩は構ひませ
るので、暫女が不可ません、其の白菊様が昔から金
輪際、女の盲目をお嫌ひ遊ばすのださうでございます

してな。」

「大層な我儘だね、と云ふが、色身な瞽女どののは私だつてあやまりませ。朝顔日記宿屋の段さね、大井川の縁で、天を仰いでハツタと來る、と牡蠣の剥身をどろりだよ、お前さん、聞いても恐れる。が、さて、何うしたと言ふんですがす。」

「否、御邸様ではね。御隠居、何う云ふものでございますかね、引續き變な、御氣色の悪い事だらけ。彼處にトオマスと云ふ、難有い事には、内閣の大臣方から下置かれました處の、其……」

「知つてまさ、南瓜、うんや、南瓜ぢやねえ南瓜だ、頓馬だね、居まはりで脊高のつぼの魚屋の定と對な奴だね。」

店の若衆が哄と笑つた。

越中屋の長助くしや／＼の目を尚ほ皺めて、奴等を睨んで、

「御隠居、彼岸の中日の夜中、一時頃で、御門を
敲いた電信配達が、キヤツと言つて打倒れましたの
で、門番の爺やが、吃驚して出て見ますと言ふと、
右の大黒犬が、土塀の屋根へ乗つかつて、流星を見
ながら欠伸をして居ましたさうで。犬が其の屋根に
上りますと家の礎がぐらつくと申すくらゐ、よくな
い兆と言ふ中に、鼠が井戸へ落ちて釣瓶で上ります
し、生りがりの柿が、ぼた／＼と蒂を離れて落ち
ます。時ならぬに蛞蝓が湧いて御床の間の柱を這ふ。
御臺所の屋根へ草が生えて、大きな蛾が飛んだり。
お求めの魚の目玉が抜けて居て、お玄關の廂で烏が
啼いたり。それはそれは可厭な可忌い事ばかり。前
例も度々の事、御邸の御記録にも残つて居ります儀
で、皆是れ雲井様御不興のお崇りでございますが、
どう調べても、お上通り、御家來衆に、手ぬかり、
越度と云ふが、嘗てございません。もしや、と八方
を捜しますと、何と御一隠居。地面内にも、何と、
直き其の井戸端の枇杷の樹の蔭に、錦木でございま
すな、右の、奥さんでございませうか、お嬢さんか、
お師匠さん、姉さん何とも得體の知れない、貴老の
おつしやる別嬪が住んで居ります。聞質しますると、

不思議に、其の、彼岸の入頃から煩ひついたとか申す事で、

扨こそ知んぬ、和歌子が雑司ヶ谷の途中から、河童に背負はせて歸つた曼珠沙華を、人の問ふのに答へて、冥途を照らす松明だ、と言つた、あはれ、其の心の裡。

頸へ財布を掛けて、兀頭を押し来たほどだから
花政が納まらない。

「越長さん、趣意は解めたがね、お言の中でがすが、雀盲はこれ盲目とは違ふよ。たとひ瞽女にもしろ、其の廉を以て店立を食はせるとは何事ですがすえ。然も直接もちの貸家ぢやねえ、言はゞ鄰同士、背合せの松飾ぢやねえ、薪雑棒と錦木だ。」

と、唇をべろんと舐めて、

「盲目が、店立に成るやうぢや、啞だと遠島だ。聾は百叩きで江戸お構。これ、壁や、手棒は死罪だね。串戯ぢやねえ。木兎、梟は晝間磔、鳶鳥は夜中獄門だ。途方もねえ。人形が祟るのは筋が違ふね、別嬪の所爲ぢやがせん。私が思ふにや、あの邸だ。食物が悪いためた。白菊、何だツけ、其の霧之助人形を飼置くのに、稗や粟ばかりなんだらう。」

若衆わかしゅの中で、誰たれやらヒヤ／＼と言いふ。．．．．
又また哄どつと笑わらつたのである。

花政はなまさ入道にふだう嵩かさに掛かつて、

「御託ごたたくはねえのだ。其その人形殿にんぎやうだいのも、崇たるなら、惡わるく遠廻とほまはしに手前てまえの邸やしきを突つかねえで、いきなり別嬪べつびんの寢床ねどこへでも、湯ゆの中なかへでも踏込ふんこめさ。直ぢか崇たりに崇たるが可よし、榎原まきはらの方も又また無む法はふ千萬ばんな、何なにのかゝり合あひもねえ裏うら鄰家らどなりを越こさせようなぞと血迷ちまよはねえで、さつさと自分じぶんの方ほうで引越ひっこして行ゆくが可ようがせう．．．
．．．ねえ、先まづ、ものゝ道理だうりが。――其そ處こで何なにかい、内うちの木兎みづくに聞きいたが、お前めえさん、其その店たなだての御上使ごじやうしにお出向でむきなすつたか、まじ／＼と。」

「えゝ、まじ／＼出向でむきますと、へゝゝ。」
今いまの（まじ／＼）と味方みかたの若衆わかしゅの裏切うらぎりに、人ひとの好いい長助ちやうすけも、聊いさか肝きもを煮にしたらしい、が、氣きの弱よわい親仁おやぢだから切きつて掛かるのも這身はひみで行ゆく。．．．．

「驚おどいた事ことには、床とこの間ま正面しやうめんの壁かへに、花籠はなかこと云いふ

處を、木兎籠は變なわけ。おまけに其の何時細工をした事やら、處々、白粉やけなどのございますな、緋縮緬の、外套やうのものを羽織らせてございます、頭にもな、耳を出して顛巻を。右の木兎が貴老、途方もない。」

と言つたのは、此の頃、花政の與四郎が、同じく、和歌子の仕着と稱する、右同斷の切を外套めかして翩翩として町から辻を自轉車で駈廻つて、時々三越あたりの使小僧の萌黄な奴と擦違つて、目を剥けば、舌を出す。鳥だか獸だか奇怪至極で、風立つた日なぞは、物騒にも炎の飛行するが如き亂行を、敢て隠居の禁抑しないのを諷したのである。

驚くものか、花政けろりとして、
「ちくりと來たね、内の與四郎も右ポチノ、だと言ふんでがせう、あれは廣告でがさ、花屋政右衛門、資本入らずで別嬪の母衣を使ふ、井伊の赤備と云ふ軍略さね、——悪く見ると、しかし、」
と、聊か聲を密めて、

「別嬪の其の、穩ならぬ此羅にも成るがね。花に遊女草があれば、草にも三味線草でさ。大海は廣いや、鯨も住めば、人魚も居る。腰から下は人間に非ずでも、時雨は裸體は寒からうと——こゝが人情ぢやがあせんかい。別して雀盲とへば尚ほ不便だ、杖を持つなら杖の尖へ菊でも結へて遣りてえや。」

若衆達をニして、

「何は、河童が酒を買ひに来るとね、來ますかい。」

「えゝ、今しがたも來ましたよ。」

また一人が、

「御隠居さんと擦違ひなくらゐなもんでした。」

「はゝあ、成ほど郵便箱のすぐ手前で、をかした犬が、ちん／＼をして歩行くと思つたが、彼奴かね、私あ目が悪いよ。」

と臉を擦つて、

「いづれも親のねえ所爲だ。……河童を飼ふのも、木兎に緋の外套を被せるのも、可かね。我

儘不埒とも言へば言ふのだが、これ、御互、銘々の内に、玩弄の般若が無くもなし、狸の掛地を掛けずとも限らねえ。悟ればそれまでゝがさ、はて、大海は廣いや、般若も住めば狸も居る。」

「海に狸御隠居様違ひました。」と小僧が黄色な聲を出す。

「ほう、違つたか、いや、年紀にはかなはねえ、大分饒舌つた。」

花政は口を撫で、

「處で要談だがね、何は措いて雑と先づ、店立ての御使者に、お前さんが出向いたわけだ。」

「決して其の、何でございますよ、差配の權柄づくで何う恚うと云ふのではございませんので、近藤友英殿、えゝ、御邸のな、昔なら千石取と申す御家老、唯今はお執事でございますな、其の方がお出向きに成りまして、手前はな、唯もう差配と云ふので、顔だけを、それとても恭々しく子爵様のお名札の据りました、白木の臺の御進物を持ちまして、」

爺様は、しゃつきりと肩を張つて、膝に手を掛け、
「紅白の水引、大奉書、中味は半紙九枚ですが
ね。」

「否、角の荒物屋でお求めに成りまして、手前、
存じて居ります、……上つ方では慙う云ふ時
のお儀式と見えまして、鹿角菜が七枚。」

「鹿角菜が七枚。」と忘れもしない、貴夫人が
牡丹の値に驚いた時のやうな異聲を放つて、
「あゝ、天道、是か非かい。」

若衆が三たび哄と笑つて、今度は拍手した奴があ
る。

「九は病、五七の雨だ、が鹿角菜だけに天氣でが
せう。」

「然やうでございますかな。」
とまじりとして居る。……町内に華族があ
れば、自分お膝許の町人と云ふ心得、成程此の了簡
なればこそ樽拾ひから此までに仕上げた、以て龜鑑

とすべきである。

花政から／＼と笑つて、

「はゝゝゝ、や、話は早い、可い、處で別嬪の挨拶は何う云ふのだね。」

和歌子は意地では引越さない、が、江戸に下町がないやうで口惜いから、或は家を明けても可い、けれども氣に入つた先の見つかるまで、と云ふか、存じのほか穩かな、併し取留りのない返事をしたのである。・・・と云ふ――

「理屈は除けてだ、ね、越長さん、生れは御邸の在方にもせい、最う此れ十何年、お祭禮の御神酒所ぢや顔を並べる連中だ。先方に白菊、霧之助がついて居りや、此方には神功皇后様、武内の山車がついて、獅子が背後に眼張つてござる。可いかね、寄合で將棊をさせば、口惜いけれど、香車一枚お前さんの方が強いや、叶はねえ。」

「へゝゝ。」「と、嬉しさうに、若衆は睨廻はして莞爾する。」

「此處だ、越長さん、ね、其の強いのが、大名華族の味方をして、風儀が悪いが、我儘が、細りした女人一人、然も雀盲のあはれなのを居所に迷はせると云つて……成角で歩を取つて頂く法があるものか、邸は邸次第として、兎に角、御差配は、すつぱりと手を引きなせえ。

店のものや、嫁、娘の手前、表向とは行かねえが、……店賃なんざ心得て話をつけよう。……無盡に當つて、内證の金子が、切餅五ツ。霜月の半ばと云ふのに、此の景氣は見せてえやうだ。」と三徳の如き手つきで、がツしりと胸を壓へた。

一も二もない、越中屋の長助、畏つてお辭儀をする。……綺麗に酒を誂へた。

「難有う存じ……」

「お歸んなさー」と、口々なり。「はい、

お喧しう、どっこいな。」

歸りがけに、さて、此の露地だ。

「あゝ、突當りに居るのが、雀盲だと思へば夜も
餘計に眞暗だな。―― 喃。若え時に、俺も何と、
總領娘を品川の苦界に沈めた。苦勞爲死に死んだ時、
何を佛に拗ねたやら、墓には曼珠沙華ばかり手向け
てくれ、と遺言したツけ、手前は目蓮のいるでも持
つて惚氣だかも知らねえが、親は骨身に應へるわい。
山の手一番の花政が、娘が遺言のすきな花を思ふや
うに見せられねえのも、報と因果だ。」

爺様は獨りほろりとした。

「何か、此處のも、秋の彼岸に、家中、曼珠沙華
を活けたとな、―― 暗いにつけて、狐火のやう
に、ちら／＼と、あゝ、目前にちらつく。其の中に、
白い衣服が、娘の幽霊そつくりだ。」

井の輪數珠を手首へ、

南無大師遍照金剛。

―― 若死するなよ、鶴

龜。

とて、ニツばかり胸を叩いて、

「長いきをさつせえよ。やれ／＼、子ゆゑの暗夜には、與一兵衛だ。懷中に無盡の金、あゝ、我ながら意氣地はねえ。しや、別嬪を露地において、水漬とは何事だい。南無大師遍照金剛。」

禿頭へ、すぼりと頬被り、寒さうに、ひよこ／＼と行掛つたのは辻である。腰を伸すと角邸の磨いた薨が星に冴えて、夜目には遠く城の如し。

「槇原の邸だぜ、はてな、地代を慾張つて庭は狭し、然して樹林の圍も見えぬ。根岸の御殿は知らねえが、新築だと云ふ見掛け普請が、奥深く棟が高え。廻はした土塀も砦の構へだ。……霜が他家並より早いのか、鎧つたやうに棟瓦が暗に光る、――大名の威光かな。……奥と言へば冬牡丹に反つた奴――はて、不思議だぜ。別室に秘めた、雲井、白菊様とか、霧之助殿――と言つたな。代々総領の姫様が、緋縮緬の下襲ね、白無垢の下髪……解せたわ、其所爲だ。」

途端である。しゆつと地を裂く音がした、黒い奴

が道を切る、と、わツと叫んで、追はれて遁げたは、
與四郎小僧。呀、頭から鹽かと思へば、郵便箱の赤
い上へ、ひよい、と乗つた。はずみにニと煽らせた
は緋鹿子のお仕被外套、印度の石地藏と云ふ體で、
日にやけた手を拍いて、

「此處までおいで、此處までおいで。」

腹なりに、のし掛つて、鼻嵐を吹きながら、前脚
をもが／＼と暗を引掻くのは勿論トオマス。早寝た、
萬年堂の溝板を、ひた／＼ひた／＼と赤面の侏儒、
横歩行して出來たる。

「何うも何とも言へませんね、滑々として柔かく
つて、堪らなく可いすな、不思議な手觸りです

よ。」

「衣觸りだと言ひ。」

と言つた。和歌子は、六疊の暗の中に、燈も置か
ず、卓子臺に凭掛つて、按摩に肩を揉ませながら、
「人聞きが悪い、身にも觸つて居るやうぢやな
いか。」

「えへへ、御新姐さん……えへ、お嬢さん、
貴女のお身體あ、僕はね、此の通りだと思ふですよ、
羽二重と云ふのですかね。」

然矣白羽二重、猶太の女の寢衣に似て、そして袖
の長いのである。寒いから、下に襲ねたのは、着古
しだが、色の白さに灰汁を洗つて、雪に、もみぢの
散残る緋鹿子の長襦袢、兩袖を引切つたのは、一つ
は與四郎の母衣に成り、一つは木兎の外套に成つて、

現に床の間の壁の正面に、眞向の、雙の眼が輝く。
時に、さら／＼さら／＼と鳥には似ない羽の音は、
翼が外套を煽るのである。

和歌子は、あの黒地に菊と水仙の友染の搔卷の、
裏の朱鷺を、腰に、迂らして膝に敷いた。

按摩は紺緋の衣服に同じ羽織、白い紐を大きく結
んだ、色の生白い、十六七の、頭の先の尖つた小僧
で、戸外を流したのを呼んだものである。

聲がはりのした奴が、舐めるが如き辨舌で、

「随分何です、僕はね、澤山のです。――無限
りなくと言ひたいですね、女を何です、手に掛けま
したけれどもね。」

「稼業が繁昌で結構さ。」

「えへへ、稼業やないです、別の方面ですよ。
ひへへ、勿論、あれです、稼業だつてね、遣つても
遣らなくつても、此で經濟を奈う恚うと云ふんぢや
ありませんや、事實。……ですからして、此

でね、療治に呼ばれて、客が男だと斷つ了ひまさ、
僕の療治は男には利きやしねえ。」と唐ぬけに禰
藏なものいひ。

「客が怒るだらうね。」と、煙草を喫まうとし
て頸を垂れつゝ、揉む手に委せた肩つきの品のよさ。

火鉢の火の影、按摩は、絲の如く盲ひた眈を、眉
ごと下げて、ニヤリとして、

「でも、男の客にや、又それだけの用があるんで
す、利かねえたツて串戯だと思ふから、確乎遣れな
んて言やあがる。そんなのは背中へ廻つて、へへの
もへいじを指の尖でのたくらして居りや可いんで。

其のうちに、女の話をして聞かせて遣るんだ。僕の
知つてる――數澤山だし、種類は多いし、大概
の男が、それから／＼ツて、僕の指の尖で、獨樂見
たやうに、ぐる／＼と身體を廻さあ。僕の經歷を話
すとだね、唐人鬚から、結綿ね、文金、廂髪、女優
鬚、大一番の圓鬚、何でもだ、其の中からね、孰で
も好さうなのを撰取つて、また世話をして遣るで

すよ、施しの氣だ、自分の持ものだつて何だつて、
功德に成るし、此方は珍しくもない、ざらなんだか
ら。施した上で禮は貰へる・・・家からも祝儀
は出るし・・・だから小遣はあり餘つて居るん
だから、しろものに依つちや、此方からも注込むの
がある。あゝ、手を動かすと懐中が突いて不可え。」

と、紐をはづして頸から取つた財布をぐる／＼と
巻いて、重さうに、亂れた掻卷の裾へ手搜りで置い
て、其の上へ、めりやすの食み出した膝を乗せた。
そして、首を出して、ひたりと、白衣の背に胸をつ
けて覆はれかゝつて、煙草の煙に鼻を寄せるやうに
して、フンと嗅いで、

「さあ、横にお成んなさい。」

唯、衣擦の音がして、言はるゝまゝに、自由に成
るらしく横に成つて、うしろ向きに掻卷をすつと裾
へ、・・・引いて取られた壓に成つた按摩は、
畳へ落ちて、も一つ財布の音がした。

「ひひゝゝ、御新姐さん、お嬢・・・姉さん

「が可いや、色氣があつて、年紀は幾歳ですえ、」

「えひょ、當てゝ見ようか。そりや場敷を歴て
ますからね、特に女にはですな。うまれ月まで違へ
ねえくらゐなもんだ。恚うさすつて見た、脊、恰好
でね。内にだつて、髪の毛から、足のおや指の尖ま
で、僕の手の中に轉がつてる女の九人と八人は居る
んだから。ー だがね、今も言つた通りだよ、
姉さんのやうな、ひょ、衣觸りかい、ひょ、こ
んなのは始めてだから、違つたら、御勘辨。蜜豆を
三杯奢らい。．．．四かね、五かね。堪らねえ
處だい。」

「按摩。」

「ほッほう。」と、木兎が床の間で。火鉢のあ
かりは谿間の一つ家、深山幽な寂しい聲。

「按摩。」

「え、今のは。」

「木兔が啼くんだよ。――山奥かも知れないよ、谷底だか、塚穴だか、宮だか、社だか分らないよ――按摩。」

「按摩は悪だね、君、君だから僕は敢て怒りやしないが、若師匠、小さな先生と言つてくれ給へ。これでもね中學の一年は學つたんだ。制帽でね、靴で、其の時にやポンと草場へ轉がりましたよ、海老茶を穿いた起上り小法師だ。ひゝゝ、たわいのないもんですぜ。」

「一寸、」

「何だね。」

「此處を何處だと思ふんだよ。」

「霞町の錦木さ、憚りながら知つてるよ。麻布ばかりぢやありませんや、淺草の姉さんだつて知つてるよ。」

「淺草の姉さんだつて？」

「知つてるでせう、公園ぢや……緋袂紗のお染と云つてね、芝居のお染をお茶の湯仕立て。抱

への八人も置いて居る大籬でございますのさ。僕は眞個の姉弟だけれど、柄がお染に肖ると云つてね、久松々々久松さあん、編上の靴で學校通ひが、ひょ、女が思ひで、風眼で見えなく成つた。が、其のかはり心は明かに光つてら。姉さんの鼻筋の通つてる、髪の毛の艶まで、よく見える。――雀盲だつて？ 可哀相だね、寂い顔をしてますねえ。」

「木兎が鳴く山家だもの、按摩。」

「まだ、言つてら。怒るぜ、僕は。」

「勝手におし。」

「可いかい、ひょ、ひょ、ひょ、然う言はれると、君だけに怒れない。さあ、此方を向いておくんなさい。」

黒髪の、黒髪の、はらりと枕にかゝる音、留南奇の香が颯と散る、木兎の聲きこゆれば、桂が薫る氣勢である。

久松の手が、ト羽二重の袖に淀んだ。

「うまからう、姉さん、稼業は稼業で、療治の方
も本筋さ。」

「すぢだか、はんぺんだか知らないが、浅草から、
こんな處まで、大變なあぶれぢやないか。」

「串戯言つてら。そんな、そんな金銭に不自由し
て稼ぐやうな御人體か、柄を見て貰えてえ。雀盲だ
から、夜で見えまい。都合で晝間出直すからね。」

「此の半年ばかり、浅草も鼻についたから、
十番に居る二番目の姉の許へ來てるんだ。失張りね、
四五人居るがね、土地だけに場違だぜ。だが、鯛鮪
も食ひ飽きた口にあ、秋刀魚のあとを丸八の黄袋で
齒を磨くのも悪くねえよ……」

「お前、口ほどにもないぢや無いか、可哀相に奉
公人を苛めるなんぞ、」

「馬鹿な事を、」
膝を、ばた／＼と疊の地たゞら。

「御人體が見せたいや。一寸でも客が居ねえと、
彼方からも久松さん、此方からも久松さん、身體が
續かねえくらゐなもんだ。浅草も、十番も、其の味

に變りはねえよ。空腹な野郎も野郎だけれどね、女
と云ふものは、また何うしてあゝだらう。雨のしよ
ぼ／＼降る、此の時雨時なんぞ、夜中、十二時過ぎ
と云ふのにだね、材木屋の辻や、石屋の角に、濡れ
しよびれて立つてる婦を見ると、途惑ひをした貴夫
人や、ひとりものゝ救世軍なんか、悲惨だの残酷だ
の、何かね、社會問題だなんと云ふだらうがね、へ
ン、主人は頻つて早く寝かせようとするけれど、奉
公人各自が男がなくなつちや寂いんだよ。・・・
岡釣が川端で日を暮すのも同じさ。どんな雑魚が釣
れるだらう、間違つて龍宮から勘當された鯉でも引
掛りやあしないかつて腹ですぜ。樂なものだとね。
汁粉が三杯、蕎麥が二杯か。おでんの立食をすれば
つて、鮎も鯰も遁がしはしません。それでも溢れる
と、あけ方の三時四時でも、久松さん後生だと來ら
ー 續きませんとも、實際。何うして婦はあゝ
だらう、商賣人ばかりぢやないんですぜ。呼込まれ
た療治の對手が、何だつて、御覽じろ、一晚旦那が
留守の處が、半日主人人さへ居なけりや、へん。―

和歌子の肩が靜に揺れて、

「按摩のかなしさ、前世の果報が拙くつて、盲人に成つたくらみだもの。然う云ふのはね、百姓や、田舎の女にばかり出會すからだ。おさんども可いからね、お前、信心をして、一度江戸兒と思ふ女に、口だけでも利いて御覽。」

「へん、では何かい、姉さんは。」

「あゝ、お姫様は柳橋だよ。當、霞町は御別荘さ。」

「燈も點かねえ御別荘だ。僕が、今夜來たてにも、魚屋かね、牛乳屋かね、大分催促が來ましたぜ。眞暗だから歸つたがね。……何も、負惜みを言ふにや當りません、男氣は無し、寒さうだ。こんな暖るものは何うですな。」

と件の財布を片手で摺らして、唯搦んだが、和歌子の懐中へ紐ぐるみ突込むと、はずみに、這つた白羽二重、其まゝ、袖を取つて、ぐいと引く。衣紋が翻つて、唇と、煙草と、齊しく颯と紅い。

「ほゝゝ、ふゝゝゝ。」「笑ふ花も紅である。

木兔が鳴いたと思へ、あの爛々たる眼を切つて、閃然と白く輝く稲妻。和歌子の頬に光を流して、寢着の咽喉の氷の短刀、按摩が右に逆手である。

「阿魔、生意氣だい。」

語氣も血相も黒く代つて、

「冷りとしたらう、氷ぢやねえ、肝にこてえて口も利けめえ。さあ、きやつとも言つて見る。長屋中が飛出す前に、一決りだ。これ、俺ア按摩だ、盲目だぞ。汝の懷中にや何がある、俺の財布だ。やい、大岡越前のお白洲でも此の言わけは立派に立つのだ。……ひゝゝ、」

と笑つた、此の小按摩は、あの手で成らねば、此を用ゐる、久松市とて彼等に知られた女たらしの低能兒であつた。

寐よと云ふ麻布聯隊の喇叭が留む。

「ふん。」 とばかりで、寂然として、搔卷の袖も冷い。

吃驚して氣絶したのであらう、と思つた。久松市が撫でゝ見るつもりの手に應へたのは、短刀に、ものゝ觸つたので。呀、威の切れもの、と引かうとすると、むかうへ引くか動かない。怪訝に思つて、聊か忙いたらしく片手を胸へ掛けて、ぐい、と引き起すと、眞綿より柔かに、なよ／＼と成つて、起きしなに、トンと肩で凭れかゝると、しかしながら戀の重荷に、久松市は背後でくしやんと腰を支いた。が、手で探つて驚いた。指が觸れてビクリとした。和歌子の手が、其の短刀の刃を引搦んで居たのである。

「馬、馬、馬鹿、指が落ちるぜえ。」 と、慌てゝ言ふ。

爾時、片手をが火箸に掛けて、火をあらけた、顔の色は、神々しいまで白く透つて、

「ふん。」 と片壓した、それさへ白い。

「えん、狂人。」

「小僧、手前たちの持つ威しの小道具は、お極り

で刃^はびきなんだ。
座^ざの座頭^{ざとう}に出^でねえな。
「――」

戸惑^{とまど}ひしねえで、二十五

面疱の引込んだ悪黨だと、最う此で見切りを着けたであらう。が、二才だけに、盲目だけに、今ので張合もなく短刀を落しながら、もう一息。

「女の癖によ、汝！」

「何をやる。」

「きやつ。」ポキリと音して、小袖の霞を越した手は、指を二本、逆に取られたのが、節を離れて挫折したのであつた。痛手に堪へず、叫ぶとゝもに久松市は、仰向けに轉がつた。

「あ、痛々々々々。」

足を悶え、胴を揉み、ばた／＼と煽つたのが、どしん、どしんと蹴はじめた。

「畜生、あ痛々々々々。——畜生。」

が、心も眩んで、足に掛けようとする女の居所を捜り得ないで、徒らに空を蹴て居るうち、和歌子は、軽く一つ手を拂つたなり、火鉢に掌を翳して居たつ

け。按摩が焦り、悶えて、痛さの發奮に、匆起きると、猫がする如く疊を筆つて、搜り手に掴み着かうとするので、

「ちよツ」

舌打して、すツと立つた。立ちざまに、ニと電燈を。忽ち明るく成つたので、然らぬだに巔倒し、惱亂した久松市は、居處も立處も方角を失つて、徒らに足で、たゞらを踏んで、片手筆りに疊の上を摺廻る。

「畜生、畜生、食殺す。」

和歌子は床わきの、波の剥げた、千鳥の亂れた襖に身を寄せ、俯向いて凝と窺ふ、・・・半殺しに手に掛けた、蛇の頭と、蜥蜴の尻尾の、裾近く、ぴち／＼匆廻るのは、餘り心持の可いものではないかして、和歌子は始めて眉を顰めた。

唯不意な電燈と此の騒動に、籠の木兎、宛然着た蓑の燃ゆるが如く、紅い外套を煽つてひよん／＼飛

ぶ。――傍の壁に寄掛けた、白羽の矢が七筋と
一張の弓がある。破魔弓、半弓の類で此の怪鳥を威
服し、かの按摩を抑制すべき武器ではない。手遊び
の揚弓で、和歌子が晝の徒然を慰む……近頃
は河童の矢取りが出来たので、一層壮に杉垣の的を
射る……其の的は敢て仔細ないが、ともする
と縁の日向に山茶花の紋が咲いた片膝立ての姿にし
て、矢を空ぎまに、木戸の絲瓜を狙つて、よッ曳い
て、音がポンと中る。又鍛錬なものだが、何となく
皮肉らしく、近所の男どもが此には弱つた。

「うー、うーむ、――按摩は、紺緋の黒い
腹を仰向けにして、甲蟲の裏返つた如く、餘程な疼
痛に手足を縮めて、引息に聲が途絶える。

和歌子は襖に白衣で立つて、恚う窺ひながら、奴
が目を眩したらしいのを試すのに、あの財布を握つ
て、ドンと投げたのが、土性骨に當つたので、忽ち
も一ツ激しく呻吟ると、弾き出されたやうにむつく
と起きて、最後の復讐、で、どし／＼どん、どたん、
ばたん。

門、木戸、水口の戸の開響、合壁の人々出合ふ
途端に、露地を風の如く吹込むものあり。

「與四公かい。」

「奥さん、――え、何だ、此の、キチノ、ば

つた。」

「畜生、畜生、畜生。」

「與四公、つまみ出しておくれ、其の蟲を。」

和歌子は、それでも雀盲のしをらしさに、搔探る

手つきをして、

「刃ものを持つてるだらう。切れはしないがね、

突かれると危いよ、怪我をおしでない。」

「へい、何だ、生意氣な蠟燭按摩、花政ン許の與

四郎を知らねえか。」

「暴れ廻る手を壓へて、襟首を取ると、ずる／＼と

引摺出す。」

「畜生、交番へ告訴をして遣る、縛られるな、女

郎、覚えて居れ。」

「をと、ひこ
一昨日来い。」

で、杖を取つて拋出すと、露地を、ひよろついで行く久松市の出鼻を切つた、挟まる杖に脛を取られて、前のめりに、つんのめつて眞うつむけ。

「交番へ告訴をして遣る、交番へ告訴をして遣る。
——縛らせて遣る、縛らせて遣る。」

餘りの事に泣喋舌りに喋舌つて、色按摩鼻血をだら／＼。

「白痴め、汝の方が締られよう。」
仔細を聞いて、合壁は静まつた。

「生意氣ツちやありやしない。」

對手を、蛆蟲と思ふほど、魔の御前の癩癢は、然うして後に尚ほ亢奮つた。のみならず、いきものゝ中にも、同じ人間の指を二本折挫いて盲の上の不具ものにした心は、靜に安らかではないらしい。あの、懐に手を挿され、咽喉に短刀を擬せられた時の花や

かな微笑は、蓋し、青く黒かるべき憤に、色を濃く染めたのであつた。

「見くびられた。」

蛆蟲に侮られたのは、鬼に虐げられたより、此の氣象の女に一層口惜い。和歌子は今に成つて、却つて、眦を上げつゝ、河童と――（此は花政の小僧が、勢よく奮んで飛込んだために木戸に忘れて入つた影法師のやうに、あの時一足をくれてちよろりと歸つた。）――與四郎とに、ものを食べさせながら、幾度も、乳房の上を、羽二重越に拂ふ眞似しては、是に肩を震はしては、指環を弄ぶやうに、右の二本の指を、熟と左の手に握りしめた。

「生意氣な、」

「鍋焼餛飩――と木戸に居る。」

折からの按摩の笛は、久松市が指の痛さに泣號んで居るかに聞える。

和歌子は、ふと顔を上げて寂しく笑つた。河童と
與四が其の鍋焼を打ち食ふ音は、三人が喋舌るよ
り賑かである。

「生意氣ツちやあない。」

む、生意氣といへば癩癩次手に、然うだ、裏の
邸榎原の靈魂とか言ふ人形の事である。何白菊だ、
霧之助だ。盲目の婦を忌嫌つて、邸へ惡兆を顯すと
紋着袴の使者を寄越した、生意氣な。総領の娘でな
ければ、主人の子爵でも顔は見せぬ。生意氣な。生意
氣な！。よし、おもしろい面を見よう。人
形の首實檢に、丁ど可い。此方からも差遣はすべき
誂への、上下つけた御上使一羽。

さあ途中まで差添への役目だが、首尾よく勤まる
か何うかを與四郎に謀ると、小僧の返答が奇抜であ
つた。

「私あね、おまけに屋根屋の悴ですよ。」

直ぐに用意。で、小僧に木兔籠を持出させ、河童

に蠟燭を點させる。と點す河童の赤面も、捧げる小僧の黄色な額も、加ふるに、外套を被た木兎も、白衣姿の和歌子の前に、髣髴として前鬼後鬼、怪しき識神の立働く趣があつた。

木兎の目と魂をして鋭からしめ、耳を尖らせるためだと言つた。成程炯々として輝いて、頭が尖つた。

和歌子が電燈を消さしたから、ちよろ／＼と臘の火が此の怪しき空間を舐める。

「與四公、剃刀を出しておくれ、鏡臺の二つ目の抽斗よ。紅猪口があるだらう、次手に――」
「何をするんです、奥さん。」

叫んで與四郎が驚いた。其の紅猪口に指を入れて、そして剃刀の刃を當てたから。

「否ね、十日や二十日、こまぎれの牛肉ぐらゐ扶持をした御主人で、此の大役をさせるのは木兎氏に濟まないからね。一時に千石御加増。本當なら股の

肉を切つて遣るのだけれど、別にひもじい思ひもさせない。それまでも及ぶまいから、指の尖をへづつて、些とばかり、私の血と身を食べさせて遣るのだよ。――

「痛い　――　痛さうねえ……………ほゝゝ、」

和歌子は擦つたさうに微笑んで、眉を顰め、

「卑怯なものだね、人間は……………覺悟しても、思切つて斬れないものだね。……………與四公、一寸行つておくれな、お前。」

與四郎は疊を退つた。

「串、串戯ぢやありませんや、……………そんな、そんな無鐵砲な　――　お爺さんに叱られら、」
と言つた、語の裡に、豫て、此の女の起居に、それとなく心着けよと吩咐けた、花政の情が籠る。……………

「何を云ふものかね、黙つてりや知れやしない。」

それも一寸だよ、指の尖をへづるくらゐ……
「奥さん、そして、何ですか、木兎が人間の肉を食ふ……食ふんですか。」

「食ひまするでございませ。」

剃刀を見て、和歌子の指を殺ぐ、と云ふのを聞くと、何故か、いそ／＼して、侏儒が、卓子臺の前面を、ひよこ／＼と踊を踊る足つきで、疊半疊、行つたり來たり。で、一閑張の縁を手拍子で敲く。……其か、トコントコントコント、幽な狸囃子のやうに聞えた。……時に、しゃがれ乾びた老人の聲で、然う言つたのである。

「もゝの身なら尚ほ甘露ぢやけれどもな、何處のでも可が、大好物ぢや。」

耳まで裂けて、爛れた口を、見るやうにした見えない目の瞼の、あたりが恍惚して、

「お河童」

「うゝツ。」

「では、お前に頼むわ。」

「うゝツ。」 一議に及ばず、白小袖の袖のわきから、あの、水掻の有りさうな手で、和歌子の眞白な手首を握ると、赤面を横に頬邊を甲につけた。

「あ。」

眉が顰むと、剃刀がカランと紅猪口のふちに鳴つて、和歌子の手に落ちた。侏儒は刃物に及ばず、黄色な向齒で食切つたのである。蠟燭の灯が空に靡いて、おなじ色が逆に下へ流れて滴る

「お退きよ。」

和歌子は、其の指から放さない血相の赫と變つて、赤いのに藍をさした凄^{すこ}い河童を、見えないながら突退けた。

「血も紅猪口に入つたの。」

「うゝツ、うゝツ。」

と言ふ。

「木兎どのに食べさしておくれ。」

「うゝツ。」

木兎の目が一雙、凸に光つて、侏儒の手に籠を出た時、さすがの小僧が、頭から半纏を引被つた。

血は、引散らした懷紙の幾重を染めた。

「食べるかい。」

「うゝツ。」

「食べて？」

「啖うた、啖うた、御馳走様にござりまあす。」

「お寄越し……」

和歌子は木兎を抱いたのである。カチ／＼嘴の鳴る音して、もく／＼其の面と胸が膨れた、はた／＼く翼は、蝋燭の火を煽つて魔風に伏せる。

「さあ、私の身代りに、お前、榎原の邸へ入つて、其の目で白菊の顔を見てお遣り、霧之助と云ふお小姓の家來が居るとさ、そんなものは構はない、白菊

だよー ー 與四公。」

「えゝ。」と、きよろついた顔を出す。

「確乎おし、頼んだよ、さあ・・・」

奴は木兔を抱き取ると、魂が入つたやうに、ぶる／＼胸を震はせた。

「遣つけるい。」

「あゝ、下駄は要らない、何うせ脱ぐ。」

燭を取つて、鉢前の縁の雨戸に、すらりと立つ。
小袖垣に散り際の山茶花と、裂け亂れた膚の衣と、
灯影に封の薄紅。

庭は一面の霜を置いて、幽な月が針を散らす。和
歌子は跣足で、與四郎に続いて、侏儒に袖を引かせ
ながら下立つた。

豫て手筈は合せたり。隔ての杉垣を足がりに、
すらりと上ると、大な樹の枇杷に潜つた與四郎の黒
い影は、木兔を抱きながら、風の傳ふ如く、さら／

と鳴らす葉が、梢の中に傳はつて、枝はづれに、
槇原の裏の物置の屋根に抜けた。唯、高波を虚空に
連ねて離れて續く、母屋の棟。

唯、身構を直すと、其の棟がくれに、鋏形うつた
片鎌の月が、きらりと、大庭の彼方の落葉松の葉隠
れに成つて恰も消えた。

黒猫の如く、背を立てゝ振向いて、
「灯を、奥さん、暗くて見えない。」
密めた聲が、枇杷の梢を霜に響く。

和歌子は襖を高く取つた、膝の紅惜氣なく、脛を
霜より白々と、杉垣に足を掛けた、が、目なし鳥。
侏儒を引寄せて、背中を、肩へ乗つてスツと立つ、
と雪なす衣紋が垣を越す、裳が落ちて、河童の皿の
綿帽子。

「うゝッ。」
「静に——」

燈をかゝげつゝ、

「見える？」

「まだ。」

で、遠灯を届かすべく、燭を取つて、袖を背へ引くと大屋根の瓦が縦に一百枚、もとに映つた黒髪の偉な影が、林を倒すが如く枇杷の梢を壓して、女の顔が、衣紋を半ば、美しく凄き白蟬の面の如く垣根を越した。

「きやつ。」とばかり、門番の爺やが此の姿に早腰を抜いたのである。

これより前、魔法の猿が榎原の屋根を這廻つて、破風の引窓を捜し當つるや、中へ木兔を放つと齊しく、ぬつと突立つたと思ふと、ちよろ／＼と蕩の波を渡返して今度は荒い、ぐわさ／＼と、枇杷の樹をもとへ戻つた。

「遣つたよ。」

「まあ、嬉しい、静にして。」

ものの十四分経つたであらう。寐静まつた檣原の御殿は、忽ち、戸障子が轟き渡つて、板戸襖の倒るゝ音、物凄く陰に響き、陽に鳴りはためくと聞くうちに、悲鳴を上ぐる女の聲、喚き叫ぶ男の聲。宏壯なる新屋形は眞夜中の都に唯一軒、七轉八倒するよ、と見る／＼、部屋々々口々から、溢れこぼれるやうに成つて、玄關へ、庭へ、臺所口へ、人礫で駈出し、飛出す。地震だ。火事だ。後で聞くと、火の玉が座敷々々を舞歩行くと見たのもあれば、緋の衣の山伏が大跨に寐床を踏越ゆると思つたもあり、中には奥殿の霧之助が突如として氣が違つて、大刀を抜いて切つて廻るとあやまつたのもある。範子と云ふ姫様は猿が寐床へ潛つたと見た。此の姫が、巴の如く立騒ぐ家族の中を、半ば夢心地に戸惑ひして、奥の室へ駈込む飯炊の女と摺違ひに、臺所口を遁出して、あれ／＼と聲を揚げた。――時に、御殿の騒動に、目を覺いた門番の爺やが、用心棒と間違へて高箒を小脇に取つて出た處、姫の聲を聞いて驅付けたのが、垣根越の和歌子の姿に腰を抜いたものである。

實に、申譯の無いばかりだったのは、御前様御二
方、お上の御寢室。で、ものゝ音に揃つて立上ると、
一大事に驅つけた家令が開けた襖を潜つて、ばさり
と踊込んだ、木兔の舞あるく眞赤な外套。

「火かついた。．．．．衣服にー」
と、仰せられると、奥方は裾をまくつた丈で濟ん
だが、あはれ殿様は丸裸、御家風とあつて鬱金色し
た越中禪。

姫の聲が人を呼んで、玄關番の書生をはじめ、家
扶、家従、小間使も、物置前へ押合つて、枇杷の葉
がくれの白衣を見た。

蝋燭をさし出し、
「垣根越にお見舞を申し上げます。」
と、和歌子が澄まして言つたのである。

扨て、其の夜の中に、むづかしき顔の家従に書生
が附添ひ、交番の警官が加はつて、いづれも色を變
へて、表から露地を入つて威丈高に談じかゝると慙

勤ぎんに手てを支ついて、

「お恥はづかしい、雀盲とりめの不束ぶつゝかさに飼鳥かひどりを遁にがしまして
――」と、しをらしく言いつた。

其それを又また何なにうしよう。中なかにも握太にぎりぶとな洋杖ステツキを持もつた書しょ
生せいは、其そのの洋杖ステツキを尻尾しつぽの如ごとく巻まいて歸かへつた。

が、木兎みうつくである。魔まの女をんなの使者ししやは、翌早朝よくさつてう、朝嵐あさあらし
颯さつとして、社やしろの大銀杏おほいてふの葉はの遠とほくから、はら／＼と
舞込まひこむ中なかを、血ちだらけの死骸しがいに成なつて歸かへつた。

繩なはからげにして持込もちこんだ、近藤友英こんどうともひでの口上くちじやうが恚かう
である。

「奥殿おくでんまで亂入らんにふしたが、霧之助きりのすけどの殿どのが、太刀たちでお仕しと
官めに相成あひなつたぞよ。」

自分じぶんに取次とりついで、これを見みた、和歌子わかこの瞳ひとみは霜しもを
拂はらつた。――散込ちりこむ銀杏いてふが黄楊ちげの櫛くし、其そのの鬢びんを
掠かすめて飛とぶ。

「他人に話せば惚氣に成る、けれどもね、お前さんに言へば懺悔に成る……」

「佛様あつかひですな。」

「可いぢやありませんか、其のかはりお肴がどつさりあるわ。」と言ふ。

餘り澤山はない。一閃張の兀げた上には、例の八ムサラダの大皿と、白丁の一升徳利、真中に、銀杏の黄なる落葉を塗盆に褥の如く敷いた上に、木兔の死骸が血を黒く、外套を緋に、嘴を落し、翼を萎して横はる。

此の日、木兔のために追甲を兼ねた謝恩會を開くと云ふので、和歌子が自分に通りの花屋へ出向いて迎へて来た、床の間の上客は、小僧の與四郎。もう一人は、境木敏夫と云ふ、右の毛の長い美術生で、此は溜池邊の下宿に居るのを、自動電話で呼出した。

御馳走は他にある、うで玉子。――小僧の分

は、鹿の子餅、饅頭。――侏儒は一枚の肉と五個の玉子を頒たれると、其を持つて例の木戸際の物置へ引込んだ。恐れながら天にまします基督が爾か爲さしめ給ふのであらう、此の河童は、敏夫の顔を見ると、夜中でも物置へ入つて出ないのが例であつた。

座に、お馴染の小搔卷、菊に水仙の友染と云ふのが無い。今日の入費に消えたのである。

和歌子は落葉を被つた木兎よりは薄寒さうな肩つきである。が、微笑の脛はほんのりと、小春日の影を盆に注いで、

「お聞きなさい、――敏夫さん、・・・・」
此の木兎にはね、私の情人の血が通つて居るのよ。」
「驚いた。」

「おどろかなくつても可いことよ。情人の話をするんだから。それだから、他人に話せば恠氣に成る、敏さんに言へば、懺悔に成る。」

「そんな事は構はないがね、木兎の血とは何うし

てです。」

「あのね、此の木兎はね、與四公も、よく知つて
るが、川越の町から秩父へ入る伊草村と云ふ所から
出たものなんです。――私がね、こんな身體に成
らない以前だわ、お嬢さんで……尤も唯今で
もお嬢さん、可ござんすか。」

と、華奢な手でよく持てる、一升徳利を片手つぎ
に硝子杯で受けて、

「名はお預りにしますがね、洋行歸りの醫學博士
と、それはね、親たち、仲人、天下晴れた結婚をし
たのよ。博士夫人十七さ。其の時は花櫛、花笄、氣
取つたもんです。……博士はね、西の方の大
學に勤めて居たんですが、三年目に久しぶりで東京
へ來ました。一度故郷へ歸つて、次手に私も親類廻
りをする事に成つて、行つた先が川越なの、川越の
町に製絲場を營つたのが博士の實家よ。ですがね、
うまれば伊草村なの、事業をするのに、農家が町へ
出たものなの。」

あの、山は秩父の山だけれど、伊草に白山の御宮
があります、比叡神社、産神様だわね。生れた土地
の鎮守だから其處へ參詣をする事に成りました。右
の新夫人か御一所に高髷か何かで氣取つてさ、時節
は可いわ、錦葉の頃。わりに暖い年でね、でも十一
月末でした。

三里と云ふ、田舎道は長いのね。俾でがた／＼行
く途中、弱つたのは、材木だの、瓦だの、炭俵ね、
薪、いろんなもの、柿の籠なんかまで積んだ牛車が、
幾臺も、幾臺も、二間三間づゝ間を置いちや、しッ
きりなし。大な牛の角なんか、乗つてる俾の泥除を
越すの。中には濡れた鼻を仰向けて、ムモオなんて
人の顔を覗いたり、白粉を塗つたやうに、額へ霜を
かけたのもある、朝が早かつたわ・・・町を離
れて、四五町行くと、もう牛車でね、狭い畝道を畝
り／＼でせう。遠くの山の霧の中から、雲に乗つて
湧いて来るやうに續いて、牛の数が果しがない。新
夫人弱つちやつた。もう、泣きたく成つて・・・
あら、可厭だ。もうと云つてさへ牛の聲で、爾時を
思出す。

(歸りませうよ。) (詰らん事を云ふな。)
と博士は遣合つた處が俾の上でせう。焦つたいから
癩癩を起して飛下りると成れば、牛の背へ乗るんで
せう。

可厭で、死んで了ひたいやうな氣のするのが、
漸と蘇返る思に成る事がね、途次不思議にありまし
た。往來が土手に成つて、づつと何處までも路なり
に畝つたり、曲つたり、田の用水かと思ふ小さな流
があるんですがね、其の小川の處々、水瀬の淀む木
の下だの、石段の角だの、流れに堰のある處と云ふ
と、吃と水に浮かして、菊の花と水仙を置いてある
んです。菊は黄菊と白菊のみだれ咲、紅いのに、中
には小菊、野菊もあつてさ。活けてあると云ふんぢ
やありません。流のなりに泛したんですから、活花
を背戸へ棄てたんだらう、それにしても綺麗だ綺麗
だとはじめ二三ヶ所で、唯然う思つたばかりだつた
んですがね、段々床しくなり可懐しくなりました。
幾處と云ふ事なし。 . . . 大概、瀬の工合と
土手の勾配で見當がついて、其處に、それ彼處にと、
思ふ水には吃とある。一寸々々、野社、堂も見たし、

塚、石地藏も路傍にあつたんですがね、其には一つも手向けてない。それとも土地の風俗で、何かの、あの、花の供養と云ふの知ら。――車夫に聞いても知らないつて言ふの。何しろ、嬉しい、優しい、しをらしい。それに氣を取られて、片側ばかり見い／＼三里餘、牛車も、そんなに氣に成らなかつたんです。

白山の御宮の森へ着くと、鳥居の前で、其の川は、路と擦れ／＼に浅く成る。土橋が架つて橋の袂に、また流に、水仙と菊が挿してあつたんですかね。

お聞きなさいよ。境内へ入つた手水鉢を見るとね、それには一輪冬牡丹。」

和歌子は弗と床の間の柱を見た。――いつぞやの、あの面影は早や消えた、其の花片に色の紛ふ酒に亂れた衣紋を合せて、

「森々とした暗い中に、燃えて、魂が、一ツ落ちてるやうで美しいが凄かつた。御宮は静な、其は神

寂びた鎮守様でね。御堂の中に、雪のやうな神馬が一頭、其は可いけれども、屋根裏には白蛇の大きいのが棲んで居るつて言ふんぢやないの。・ ・ ・ ・ 私やなくツちや、女が入れはしないわね。

其時さ、奇代だつたのは、十五も二十も、大いんだの、小さいんだの、澤山繪馬が納つてゝね。皆それ、

目を合せて、敏夫も疾や其の意を悟つて、齊しく銀杏の落葉を視た。

「どれにも木兎が描いてあるのよ。三體見まい聞くまいのやうなものもあるし、飛んでるものもあれば、留つたのも固よりだわね、皆、頬邊を恚うやつて、」

「お止し、お止し。」

「あら、與四公も遣つてるよ、頬邊を。」

「へへへ。」

「御堂の中が、目に成つて、喙に成つて、翼に成

つて、何十羽だか皆生きてるやうぢやありませんか。
書も、朝のうちだつたから可いけれど、月夜でも
御覽なさい、ばさり／＼飛出し兼ねない。――
森で眞個のが一こゑ號令を掛けたら、何うでせう、
揃つて鳴くわ。中にも人を馬鹿にしたのは、繪馬が
倒れかゝつて、白馬の鞍に乗つてる洒落た木兎ちや
んがあるか、と思へば、落ちて仰向けに轉がつて居
るのもあるの……うまいなあ／＼ツて、繪の
好きな博士が感心をして居たわ。何う云ふいわけなの
此の所説は。博士も知らずさ……小兒の時分
お宮で遊んだ博士は、此の繪馬を見なかつたつて、
――自分の亭主を博士々々……豪さうだ
けれど、今は他人だ、まけておけ。――と冷酒を煽
る。

「僕も飲め。」と、敏夫が硝子杯を。

「杯を合はせませうよ。」

「何故？」

「博士の健康を祝して、」

「厭なこつた。」

「可愛いね。」

「澤山だ。」

「何うして、此のあとが肝心な木兎の話なのよ。」

「否、その、木兎が澤山らしい。」

「あら、罰當り。」

と目を涼しく、

「私を、いろに持ったのも、敏さん木兎か媒妁だわ、ほゝゝ、結ぶの神を失禮な。」

此の金と力の無い青年は、恚う言はれても仕方があるまい　――

今年秋のはじめ、學校なる教室の前の櫻の枝に、戸惑ひをして留つた木兎が一羽あつた。素早いのが、ひらりと窓を飛んで生捉ると、孔雀の標本をはたき出して其の籠に安置した。然らぬだに、もの凡て平かならずとして、筋骨金風に鳴渡り、不羈と自由を生命とする美術家が、我が佛得たりとなし、總勢二百有五名、立處に同盟の鯨波の聲を合せ、各自が、紙袋仕立ての木兎の面を頭からすぼつと被つた、一列を長蛇に備へて、折から某展覽會開展の初日と云ふのに大公園を練り廻つた　――

先陣が拂をかける。

ホツホー先のける、ホツホー先のける。
後陣が制止を放つ。

下アに、下アに　――　下アに、下アに　――

袋の中の聲を揃へて、

木兎殿の御通りだ、木兎殿の御通りだ。

（ホツホー先のける、ホツホー先のける。下ア
に下アに　――　下アに下アに　――

木兎殿のお通りだ、木兎殿のお通りだ。）

不思議な事には、山中の烏が眞黒に成つて雲を蔽
うて啼噪いだ　――

其の時、籤に當つて、唯一人面を被らず、氣勢に
逆立つ、長髪が頭が、木兎籠を頂いて、校中名代の
背高が、列の眞中に、いとゞ爪立つて押したのが境
木であつた。　――　此の役は樂でなかつた　――

かはりに、人動搖の中から一人、ふるひつきさう

な貴夫人姿の艶なのが、ツと、摺違ひ状に、衣兜へ
紙片を挿んでかくれた。

和歌子が、それに、鉛筆ではしり書したのは、簡
にして要領を得て居るから、其の全句を抜く、曰
く・・・・・

「――モデルに成つて上げませう、雇はれるんぢ
やないから、私の内へ入らつしやいな――」

「土橋を渡つて、羽織袴で二人連立つてね、鳥居前から、もう帽子を取つて、進んで階の下へ来て、一人が恭しく禮をすると、一人の老人の方はね、差した扇を膝に開いて、土下座をしたぢやないの。」

博士と私が立つて居たから、急いで、神馬の前を傍へ退いて上げてね、あゝ、神様を拜むのに、此の位な心持でなくつては、と其のね、眞實なのが、何だか、私、身に染みて胸が切つた。

然うすると大變よ、二度目のおじぎは博士にしたのさ。まあ、何うしたら可いだらう、と思つた。……（貴方は××博士で入らつしやいませう……本日此の白山様へ御參詣のことは、町から傳へ承つて存じて居ります。——）

あの、村をすぐつても、途中まで出迎をしたかつたけれど、二人ぎりで産神様へ來たのに、却つて心を騒がせようから、それは控へた、と言ふ口上でね、

若い方が然う言ふの、少いたつ三十六七さ。老人の方
方は、其の父さんなのよ。でね、

(弟か) (次男か) と二人で云ひます。

東京の美術學校を半途でよした、弟が病氣をして
居る。其の診察を頼みたい、—— 其の時、分つ
たわ。小川の菊も、御手洗の牡丹も、私たちの來
るのを知つて心ばかりもてなしに、背戸畠のを折つ
て挿した、が、それは親兄の手ではない。病人の弟
が自分でして、と云ふ事よ。何うして、まあ、袴で
醫師を迎へようつて人が然うやつて花を配つたらう
と思ひましたかね、成程、分つた…… 唾なの。
それも中年からなんだつてさ、其のために學校を引
いた、と言ふの。

でね、可恐く頑固で、強情で、幾ら勧めても、自
分では醫師に診て貰はうと言はないし、固より薬も
飲まない。…… 然うかつて親兄の身にとつて、
黙つて打棄つても置けないし、二年と三年分別に盡
きて居た。思懸けない片田舎へ博士のおいでは實に

神佛のお引合せであらうと思ふ、何うか手前どもへ
お立寄下すつて、診て遣つて頂きたいと、そりやも
う氣の毒なほど、手を突いて頼んだよ。

一も二もありやしない。すぐに行つて上げるだら
うと思ふと、博士がね、斷りました。」

「斷りましたか。」
聞いて居た敏夫も案外な様子である。

「えゝ、斷りましたよ。（私は内科だから分り
ません。）捻つたわね、先生、實際咽喉科ぢやな

いんですからね。――否、決して悪くは言はな
い、――博士の責任を大事に思へば、其方が當

然……又、實際年は若いけれども、眞面目な
學者なんですからね、對手がお百姓だからなんぞ、
と思つたんぢやありません。それは私にも分つたけ
れど、此處は奥さんの役でせう……人情に搦
んでね、分らないまでも診てさへあげれば、醫師が
嫌ひな病人――それも嬰兒と思へば憎くなし

――親御、御兄弟の氣安めだけに是非貴
郎……で以て、新夫人、艶のいゝ圓鬚の意

氣好みで生意氣な、藤色鹿の子か何か横にして見せ
たから、博士が黙つて頷いたわ。――牝鶏の鬩と
か何とかさ、忘れたけれど……。――旦那が板倉内
膳正でない限りは、一寸女の差出て然るべき所だわ
ね、ほゝゝ、何か然るべきだらう。」

笑つて息續ぎを引掛けて、

「二ツツ、おたしなみのお職掌道具を入れた革靴
があります。車夫が持たうと云ふのを、故と奥さん
が御手づから。少々煩かしく言へばね、大學の分科
の専門をして、一寸……。神聖ならしめようと
すると来たものよ。――まあ、お聞きなさい。――
博士の自信をまげさしたから、心持を悪くさせま
いと精々御機嫌を取る氣か何かで。――大きに家
庭劇を發揮したの。」

屋根は見えて居ました。車にも及びません。――
路は別で、あの小川の流には分れたので、水はあ
つても、それから前に、小菊と水仙は流しては無い
のだけれど、舊來た水の影のやうに、づつと行末の
雲にまで色が映るやうな氣がしたわ、空が澄透つて、

秩父の山々、武甲山、笠山が、ぼつと紫に霞んでね。

が構内へ入ると、下男、下女、大勢ばら／＼出迎へたのよ、大百姓と見えるわね。一度御休息と云つたけれど、博士は急ぐから早く診ませう、其の方が勝手だつて、すぐに病室・・・ぢやない、張出しだと言つたわ。其の弟と云ふ男の居る處を・・・其處へ引籠つてる、めつたに母屋へも出ないんだとさ。ー 唾で、片意地の、旋毛が曲つて、陰氣に引込んでばかり居るのだらうと思つたの。

ー さあ驚いたわ、大變だツちやない。ー 唾の片意地の旋曲りでご御勘辨が願へますかつて。・・・あの水に、花の道しるべが無かつたら、可加減お轉婆な私だけれど遁出して了解處だつた。

何うしたツて處ですかよ、ー 敏夫さん。ー

ね、成程張出したわね、疊百疊敷ぐらゐ、床も板張りで、四方を圍つた、がらんとした、然うね、何

の事はない、椅子卓子を取拂つた學校の教場を云つたものなの、四方三方、木兎の繪で充満。」

境木も、與四郎も眼を二つた。

「木兎の天、木兎の地、木兎の城だわね、
・
・
・
繪馬も分りました。」

と言ふ時、和歌子の瞳は、秩父の山を見たと言ふ、透明、玲瓏とした其の空の思はるゝよりも尚ほ澄透つた。

「繪が抜出したのかと思ふ、ばさり／＼飛んで歩いて居るのがある、どれが眞個ものだから分らない。中にはね、描損つたと見えて、折つたり、摧いたり、引裂いたりした、大な目一ツ耳の尖つた頭の缺片、片翼、床にちり／＼に成つて、こんなのに影が湧いて、却つてむく／＼動きさうでね。おまけに樹林の中でせう。天井硝子張の明取から、枯葉の樹の枝の映るのが網のやうに擴がつてゝ、何だか、魔に攫はれて樹の上を傳はるやうで、足もわな／＼する。」

むか 向うに、一段高く築いた、お湯屋の番臺見たいな
ゆか 床を組んで、薄汚れた服装して髪を眞直に逆立て、
ど 度の強い近眼鏡を光らして、繪筆を引搦んだまんま、
きやく 客と見て眞四角に坐直つたのが、肩を怒らした脊が
たか 高いから、宛然、ぬくり突立上つた形なのよ、御次
男です。――敏さん。」

「あなたと學校は違ふけれど、矢張り美術の生徒だ
つたの、一寸御紹介申しませう。」

と、貧乏徳利でがふ／＼と酌をして、

「吉岡展。――展は展覽會の展の字よ。」

「僕は落第だ。」

と、ぐい、と硝子杯を引いたので、注ぎかけて居
たのが溢れて、淋漓として滴つた。

和歌子は澄まして徳利を控へて、

「あんな處へ及第をしたがるのは女房の欲しい人
さ……其のかはり情婦は出来ない。」

と片手を頬杖して顔を見る。

「飲め！」と、半ば苦つて、半ば笑つた。そして手巾で膝を拭いた。

「親御と兄さんが、黙つて唯叩頭をするのよ。博士が爾時ね、可恐がる私の手を取つて、つか／＼と出た。――木兎の憑ものがした唾の狂人、いきなり兩袖を羽打つて天井へ舞上りでもしようかと思つたら、立派に丁と謹んで挨拶をしました。筆を剣のやうに片膝に突立てゝね。

おとなしく診察をして貰ふのよ。……明窓をあけさせて、丁寧^{ていねい}に身體を觀て、更^{あらた}めて、それから瞬^{また}もしないで咽喉を診ました。

「治る、今直ぐに治してあげます。私の言ふ通りになさい。……然^さう云つた。」

――（博士の態度は肅然たるものであつた、）

――

「少し身體をあとへ引いてね、博士がね（――私の聲にお續きなさい。）……と云ふ。」

唾は頷いたんです。

「い」と博士が呼ぶ。黙つて居る。「ろ」
博士が叫ぶ。黙つて居る。「は」博士が云ふ、
黙つて居る。……」
與四郎は聞きつゝ、ごく／＼と咽喉で云つた。

「いろはにほへとちりぬるを、一つづつ言つても
聲の出なかつた其の唾がね、「わアかア」と
博士が言つたと思ふと……「わーかー」
……唾の咽喉から聲が出ました私は博士を神だ
と思つた。拝みたく成つたんです。

も一度、博士が、「わーかー」
「わーかー」と唾が言つたと思ふと、
「和歌子さん。」

其の聲で唾が呼んだの。木兎がものを言ふと思つ
た——私は思はず、ぶる／＼震へた。

「（和歌子さん、——貴女は私を御存じある

まい。私はよく知つて居ります。……私は戀をして居ました。御結婚が終つたと知つて、噫萬事休す、男子世に生れて、口に戀人の名を呼べないくらゐなら、一生、末世、金輪際、聲を出す事は斷じて要らん！――其時から夢にも口を利かんです。不思議な運命は死に先だつて御主人の前に貴女の名を呼ばせました。」

――博士に――

「（御診療を謝します。……が、貴下は敵だ、道を清めて心ばかり花を捧げたのは、貴下を迎へたのでない、奥さん――和歌子さん、もう一度貴女の名を呼ばして下さい。……和歌子さん。）」

「（はい、）とつい知らず、返事をする、と、颯と色を變へたと思ふと、眼を塞いだ、あれ、血が唇を。舌を噛んだ。忘れもしない、尻が颯と卷落すと吹込む銀杏の葉と一所に、繪が飛んだのが、窓を舞下つたのか、大な木兎。」

和歌子は、思はず、盆の銀杏の葉を取つて、唇に

當てゝ、犇と嘯む、と皓齒が鐵漿を染めたやうに見えて、其が不思議に初々しく、瞳は涼しく、頸は清らかに、心の影の塵も留めず、通ふ血汐は霞を描いて、同じ女にも又較ぶべきなき美しさであつた。

「ねえ、苦しさに、仰向けに血を噴いたのが、飛下つた木兎に颯とかゝつた時、私は身體を投つけて―― あゝ、死んぢや、不可い、冷くつて。」

其の盆の木兎の嘴に――涙の顔を振仰向く、と婀娜な微笑。

「與四公。嘴を。」

突如小僧を横抱きに抱轉がす、石頭の大な木兎、重量、十四貫三百匁。

「失敬しよう。」

「おや、振るかい。」

「勿論です。」

「何故さ。」

「それまで聞かせられて、これまで見せられりや澤山だ。苟も僕は男だ。いつかの行列の事を思へば、そんなんだと、僕は、木兔に頭を蹴つけられたと同じ事だ、馬、馬鹿にしゃがる。」

「ふん。」と笑つて、

「妬くね、此の人は。おや可笑い。——男の

嫉妬を妬くのは、婦の品行よりか世の中のすたりものだよ……見つともないわね。」

「何うせ見つともよくはないんだ。」

「勿論、見つともよくありませんとも、髪は長し、額は長いし、日は短し、靴足袋は破れてるし、ね、——然うさ、また、あの木兔を擔いだればこそ不思議に色が——ツ出来たんだわ。色と言ふもの

は亭主ぢやないんだよ、可かい。でも、お前さんは可愛いことを云つて。（自分は半分苦學をするので、腕はなし、働きはなし、何の助手も出来ないから、こんな事は言はれた義理ぢやない。が、心の中を察してくれたら・・・そりや他に、人も、男もあらうけれども、せめて、自分の、目に見える處へだけは、誰も寄せないでくれる。）――と言いつたね。・・・言ふことが氣に入つて、しをらしいから、爲なくも可い我慢をして、御覽な、まあ、此の頃の、内の體裁を――お姫様が其の日ぐらしさ。恩には被せない、私が勝手――道樂だから。串戯にも妬けた義理ぢやないぢやないか。けれども理屈は言やしない、憎くはないから。だけでも男の嫉妬は見つともないからお止しなさいなね。」

「濟まない、が、餘りだ。私は妬きません、妬きませんが、歸ります。歸つて、木兎の繪を描くん

だ。」

「あゝ、結構。・・・御自分のためにも、親御、御兄弟、世の中のためにもお歸んなさる方が結構です。・・・ですが、いろの爲には何にもな

らないから。……然う思つていらつしやい。
そんな掛引はね。」

「進退！ 進退とは何だ。」

「ぢや、眞個にお歸んなさい。が、一寸お待ちなさいよ。」

卷莨を吸着けて、

「さあ、」

と、くの字で持つて出す……吸口を男の唇。
「いや、兎に角歸るから。」

和歌子は艶に莞爾して、

「ほゝゝ、だから、露地を吸つてお出掛けなさいな。誰も留めはしないから。」

いや、然う言はれると、まさか、一本貰つて出られもせず、其處で敏夫は押立尻をして、

「飲んで行く……」とばかり、冷酒の硝子杯の殘餘と煙草をちやんぼん。吸つちや飲み吸つちや飲む。——與四郎が居たらば其も出來まい、石頭の大木兎は、今の一件に羽を生して、露地を横

飛びに飛んだと知るべし。――

「あとは獨言よ、聞かうとも聞かまいとも、煙草の間……」和歌子は投げた手を額に當てた。

「あゝ――博士が些と妬いたわね。――

私は其の時、舌を食切つた唾を抱いたと思ふと、後を知らない。母屋の座敷で氣が着いて、泣く人やら、鬱ぐ人、考へる人、俯向く人、黙つた人に送られて、博士も矢張默然で、白山様の前まで歸つた時、然うだ、ふつと氣がついて、

「あゝ、牡丹を持つて来よう。――手水鉢

に――木兎の畫を描く男の、鬼火が光るんですもの。

「止せ、そんなもの。」

「否、止さない。」

博士の留めたのが口惜いから、駆出して、羽織の袖に抱いて歸ると、可厭な顔をして睨んだから、もう一度拗ねた。――「私は人間の道を歸るのは

可厭です．．．．．牛車が可恐いから．．．．．」

其の時は、一臺の影も見えないのに――「否、往つたものは吃と歸る．．．．．途中で逢着すに違ひないの。」然う云つたのよ。博士がね、

「何處を歩行く。」

「此處を歩行くわ。」

でね、駒下駄を脱ぐと足袋跣足で、石垣から、樓も取らないで小川へ入つた。早い處が瀧を上るやうな勢で澄まして抄ると、博士の俣が矢のやうに飛んだんです。それを見ながら、水が深く成つて倒れました。

一晚、伊草村の御厄介。あくる日、歸らないと云ふのを歸さうとするし、送らうと云ふ展さんの葬式を送らせないから、途中まで、棺桶と並んで出た、私は駕籠で。大勢に取巻かれて、路を分れて川越へ歸つたんです――

御離縁申すまでもござんせん。自分の家からも御勘當、と云ふのがね、義理ある兄の代に成つて居ましたから、義絶と言ふの。

些と擦つたいでせうけれど、一寸、惚れなほしては不可い事よ、此でも伯爵の御落胤なの。と云つた。不思議に此の女、品が備はる。

「母さんは新橋の藝妓でね、止せば可いのに、若いから何にも知らずに、其の伯爵の世話に成つて、私が出来たとお思ひなさい。まだお腹に居た時よ。

「ぼツと成りかなんかで、もう四月とか何とか殿様に聞えあげる、と何うです。……伯爵が後とも言はず、其の晩、内證で待合の女房を呼んで、（彼女には内々で、客帳を開けて見せる。）と言つたつさ、宿つた月日を當らうと云ふんだわ。外の客と引較べて、伯爵様お手づから御帳合。赤子の出入帳は地獄にも沙汰を聞かない。女將も江戸兒だから癩に障らして、密と筒抜けにしたんでせう。母さんが、蒼く成つて、其つ切。……私を産んでからも世話に成らずに、意地を立通したけれど、苦

勞をしぬいたもんだから、二十七の若死に、臨終に
氣が折れて、九歳に成る時、お邸の言條通り私を引
と取らせたツて次第なんですからね。急拵への御姫様、
面倒くさい　　母さんが中程住替へた柳橋に居
た時が忘れられないで、幾度駈出さうとしたか知れ
ないの、窮屈でね。何うせ、待合の帳面に紅で印の
ついたお姫様なんだもの。

　　露西亞は、のん氣だつた、生命は危かつた
けれどもさ　　

でもね、はじめ満州へ行くのに、博多から汽船へ
通ふ端艇が出ると、麗な小春日に、光る魚が晃々舷
を泳いだの。私、欲くつて成らないんでせう。

「(タビ) さへありや。」 然う言つた人がある。
(二つあるから、澤山とつて。) と私、兩方の
足袋を脱いで笑はれたわ。後で分ると對州の人だつ
たの、對馬ぢや (タモ) の事を (タビ) と
言ふらしいわね。

一寸、お姫様でせう。たゞし足袋だけに下つてゐ
る。

「和歌子さん。」

「はあ．．．おや、更つて。」

「私は、貴女にや、まるで、今の其のタビですな

あ。

「酷く御感心遊ばしましたね。」

「考へなきやあ成らないんだ。」

「惚れてると云ふのでせう、そんな、煩かしい、

謎見たいなことを言はないで、足駄穿いて首つたけ

と云ふものよ。」

「否、洒落ぢやない。」

「眞面目だね。酒がさめて．．．あゝ、薄ら

寒い、敏さん、暖まらうか。」

「いや、歸ります。歸つて木兎の繪を描きます。」

「然う、更めて、身の上話に、同情とかツてのを

してさ、奮發して、私を何うにかして下らうと云ふ

のならお止しなさいよ。何うせ初から貴方は玩弄な

んですもの。怒つちや不可い、珊瑚も金剛石も、言

つて見れば玩弄品だもの。木兎籠を被つたつて、そ

れが、私に．．．立派な彫刻か、繪に見えれば、

貴方は貴いものだわ。それとも、口惜しかったり、
妬けたりするのならお止しなさい。私にや、意地を
張ると後悔するから。」

「何を後悔。」

「未練が出て、暗夜に此の邊をうるついで、私が、
あの、白い寝巻で、裙と手に紅い火のちらつく處を、
見ようものなら、……後悔するから……」

敏は、蒼く成つて、其の將に然るべきを豫期し
つゝ、然も如何ともする能はざる苦悶の色を漲らし
たが、さすがは男だ、衝と立つた。

「失敬。」

「ぢやあ、然やうなら。思はせぶりに送りませう、
兩花道の出と云ふ處……」

で、格子を出る男の、あとから、縁を下りて木戸
へ出た。其の時、何故か、床にあつた、あの楊弓を

手に取つた。

庭の木戸へ、此の姿が片扉で立つた時――
（花政の一捻りに今は鋒先を納めたが、店だてを強請して斜めにはつた）――貸家札も、かしくと讀める風情あり。

白衣に灯す、蠟燭の、白脛ちらめく緋く縮緬、白晝ながら佛立つて、敏の足が羽目について淀んだ時、恰も町通りを縦に打つて通る××師團の騎兵少尉の、立派に盛装したのがあつた。駒は山の如く露地を壓した。的は大い、射ごろは可。

和歌子が軽く曳いて弗つと切る、と白羽が發と馬を射た。唯棹立ちに成つて、嘶く聲より、拍車の音が鳴響いて、見事に乘鎮めて、翻然と下りた。咄嗟に、革手綱を高く取つて、露地を見込んだ、風采を見よ。

「誰だ。」

「何をする。」

敏が、思はず我事のやうに言った。

楊弓を小脇にして、

「羊のはりに、七面鳥を食べるの……ク

リスマスが、近いから。」

翌日は、早や花政の店の中へ、剣を鳴らして其の
少尉が直立った。嬉しさうに花を見ながら、

「牡丹を——」

「お河童。」

「うゝ、うゝ。」

「眞暗な路だね。」

「うゝ。」

「お前は私を引張つて、どんな處へ、何處へ連れて行くの。手水鉢に牡丹の花の活つてる處かい。」

「うゝツ、うゝツ。」

「ぢやないの、然うね、何うせ、そんな心意氣は知らないから。屹と何だらう、昔噺のやうに、寶の瓶の埋つてる處だらう。」

「うゝ。」

「おや、嬉しいね。」

と微笑んだが、雀盲の瞼は寂しかった。．．．．．
 和歌子は「（其れより後、幾度も幾度も、其の白衣に灯した姿を縁に露はして、暗路をあこがる、敏夫を知りつゝ、堅く、木戸を鎖し鎖しするうちに、彼が発狂して自殺した事を聞いて。）」「――したゝかに酒を煽つた酔心地を、頻に侏儒に袖を取つて曳

かれて、庭の木戸から、物置の前を、半ば夢心地で町へ出た事を覚えて居る……

が、方角も何も分らぬ。唯侏儒の導くまゝに袖をまかせて行くのである。現ながら、此の怪面異體のものゝ、我が身を載せて赴く前途には、いづれ奇蹟があらうと思つた。あはれむべきは、そして其の期する處は、牡丹の花の一本より、戯に言つた寶の瓶より、實は一條の光であつた。―― 慙くまでの婦にも。―― 恰も其の病にかゝつた棄身の出來心で、ふと曼珠沙華を折つた雜司ヶ谷の途中から連戻つた畸形兒であつたから。――

―― 袖を任せて行くのである。唯、霜のしん／＼と降りる夜の、風も無いのに、前途が颯々と裳を切る。

「頓馬が、一緒なの。」
大な犬が、ひた／＼と裾に摺れつゝ通るやうである。

「うゝ、うゝ。」

「どつちだか分らない、お前が乗つてるのぢやないか。私が乗つてるのか知ら……」

また、もの音に打傾いて、

「牛が曳く車が通りはしないの……汽車かね、水の音なの。」

「いんま、川を一ツ渡つたぢや。」

「あら、私は空を飛んでるの。」

と思ふと、身體が浮かないで、足が雲ならぬ地を踏みつけた。然も段々に低く降りる。泥の香、樹の匂が芬とした。

餘りに足が低く下りた。
和歌子は、爪立つて襦を留めた。

「お河童」

「うゝ。」

「何處だか、教へておくれ。……口惜しいが、見えないから。」

「うゝツ、見えませぬか。」

「察しておくれ、だらしは無いよ。」

と、俯向いて白い手で探ぐる、とにちやりと滑ら
かして、侏儒が其の手を取る。

「もう、やがて見えるぞよ。」

和歌子は振拂ひもしないで、

「あゝ。」

「それ、星が見える。」

はツと思ふと、晃々と霜夜に冴えた星の數。が、
其の星は、高く蜘蛛の巣の如き樹の（枝と思ふの
が、）土を抽いたあらはな根に散る。・・・横
穴を穿つた深き地の底に居たのである。

「彼に燈がある哩。」

大なる樹の切株を卓子の如く一段高く据ゑたのに、
かんでらめいた燈火が點れて、正面の土饅頭を、椅
子にして、ぬい、と、向う面に腰を掛けたものを何

とか見る、小牛の如き黒犬である、トオマスの頓馬である。這奴、のつぽ面の垂耳の頭に、紅い土耳其形の帽子を戴き、空嘯きつゝ、チン／＼の手が、此方を大風に靡いて、

「わあ、わあ、い、い、わあ。」

和歌子は夢だと思つた。思ひながら、然も氣丈であつた。侏儒の且つ引くまゝに、つか／＼と燈の前に進むと、

「ごろ、ごろ、ごろ、にい。」と鳴いて、椅子の横に腰を掛けた、古猫が一足居る・・・見覚えがある、あの、錦木の宿のあたりを押歩行いて、屋根中を汚す風來の、男猫で、（）――官吏の家に飼つた、駒と云ふに優げな雌猫を狙つて、嫌はれ通しの腹癒に、其が産んだ小猫とともに、對手の猫を食殺した、（）――顛破れの三毛が、釜底帽子の青いのを被つて、爛々たる眼を光らし、和歌子を睨迎へて呻ると齎しく、鋭き爪で、顛の鬚を掻捻つて、片手で卓子の上に置いた一冊の帳簿を示した。

和歌子は尚ほ信じた。恚る思ひに因つて雀盲が癒えるのであらう。指さゝるゝまゝに其の帳の面を見た。「……」
「……」花政の娘お光の名、眞先に記したり、嫁のお久、官吏の令嬢、銀行員の若い妻、和歌子が名を知つた居まはりの女らしい女は、一人もつけ落がない。榎原範子。子爵の令嬢である。其の小間使が三人。湯屋の女房、花政の表町に錢湯があつて、女房が美婦なので、其もあつた。――

湯屋の女房。

名の上に、赤と、黒、汚れた黄で、不思議な、意味を爲さない點を幾つも打つてある。讀んで和歌子が、自分の姓の錦木に瞳を据ゑた時、トコトン、トコトン、トコトン、と此奴は侏儒だから土饅頭の椅子へ、ひよい、と立つて、切株のまはりを敲いて、頸に巻いた、黄色な手巾をひらめかしつゝ、勿ねて居たのが、赤爛の手の、蚯蚓の如き指で、和歌子の名に指して、

「うゝ、今夜は、汝の番と思へ。」

「あれ。」

和歌子は、うまれて以来、嘗て知らない悲鳴を上げて土に躓き、よろめきながら、穴藏の段に飛つくと、上から、眞黒な面で、倒に覗いた、大牛が一頭、モウ、……ドン、と寝て、腹を以て蓋に蔽ふ。

「母さん、母さん。」

思はず、亡き母に救を呼んで、中空に縋る手は、左右に取つて開かれて、打込んだ杭に、其の兩の脛も縛められた。

「堪忍しておくれ、堪忍してー」

「おのれ覚えとるか。」と云ふ／＼、穴には彼等三頭ではない、鼯も鼠もどろ／＼と満充ちた片隅から、這出したのは按摩の色男久松市である。

「忘れまい、忘れまい。」

いつか、挫ぎ折つた二本の指で、女の兩の頬を交る／＼、ふた／＼、と嘲笑つて引弾かれた時は、其の冷さ、其の不氣味さ、其の可忌さが骨髓に通つて、

亂れた黒髪が皆動いた。

懐に手を掛けようとする、侏儒が横合から躍上つて、按摩の顛を蹴落した。

「退れ、下郎、汝には食のこしを授けるのぢや。」
和歌子は帯を奪はれながら、伊草なる吉岡展の最期を思つた。彼は葬られたのである。我が亡骸の、あとの屈辱と汚辱を察すれば、舌を噛む事さへ出来ぬ。瞳は破れて曼珠沙華の幻の如く颯と血汐が眦を走つた。

時である。穴の上に、雷の如き音がした。づん、と大牛の轉んだ響。唯見ると、穴を飛下り状の、萌黄の袴、黒小袖、手に三日月の輝くは、晃乎と振閃めかした小太刀である。

が、忽ち眩んだ、和歌子の目には見えすして、
「うゝッ。」

眞先の、號苦の聲は侏儒。續いて、叫ぶ聲、呻吟

く聲。駈廻る音、倒るゝ響。

「や、や。」
爽に清い矢聲の下に、颯々と鳴る

は太刀風である。

犬が潜んで来て、牙が、和歌子の身に觸れた。

「あッ。」

「畜生！ 推參な。」

ハツと唯一打、後は死の如き、墓の如き、寂寞であつた。

抱起されて、縋つた時、和歌子は見えない目に、男の髪的美しさ、と袖の薫を知つた。

手を取られて、萎々と成つて、肩と思ふに顔を伏せつゝ、嬉しさにすゝり泣いた。

「此處まで。．．．最う可い。」

と、手を放すと、力なくニと成りつゝ、袖に縋つ

て、

「誰方、誰方。」

「
御隣家の
霧之助。
」

熱に浮かされて、もの狂はしく呼續ける。

やゝ、人心地が着いてから、花政が仔細を聞くと
――生命に掛けても、榎原の人形が見たい、と
言ふ。和歌子は、はじめて戀を知つた。

世故を経た爺様が、よく情愛を知つて、大く頷いて、死んだ姉娘に婿を取るのだと騒いで、其の人形を、と種々手を廻した。越中屋長助にも下ぐべからざるに頭を撫でゝ見たが、これは出来さうな事ではない。

「霧之助様、霧之助様。」
正氣に成つても、譫言に言續けた。

「お爺さん、大變だ。」
一夜、與四郎が目の色を變へて飛んで歸つた。

「和歌子さんが、白装束で、杖に縋つて、榎原の邸へ行つて、皆に酷いめに逢つて居ます。……」

爾時、爺さん、節季近の忙いのに、花鋏を投出して、

「さあ、野郎ども、霞町は火事だと思へ、續いて来い。花屋政右衛門、娘の追善に暴れるんだ。」

と、手鍵を杖に、ひよこ／＼して、

「與四公、こんな時の用に立つ、自轉車で合乗しろい！・・・」

爺様が駈着けた時、和歌子を、古井戸の板に眞傾向に倒してあつた。

あの、奥方は、枇杷の根に床几に掛つて、家扶、家従、執事などが取巻いて、書生と車夫が釣瓶を倒にして、和歌子に水を浴びせて居た處である。

花政が手鍵を握つた。

「俺の娘だ、此奴等。」

誰の娘でも構はぬ。・・・見せる事の成らないと云ふ當御殿の霧之助殿を斷つて拝みたいと申す。御前は旅行中。奥方、應接間でお逢ひなされて、此の上は、當方の思ふ存分に成るか。汚ららしい身體

を清めるが可いか、と訊く、と望む處だと、云いふから、恸く計ふのである。――念のため當人に聞けとの事である。

和歌子が突伏せられ、おしひらめられながら、蒼白い顔に莞爾して、

「お爺さん堪忍して、思ふやうにさして下さい。」

奥方がしたり顔して、

「それ、背中ばかりでは不可ません。腹の方もお洗ひ。」

「え、衣服は汚え。」

と書生が黒髪を搔掴んで提げるやうに引起したので、痛みに雪の足をかぐめた、宙に釣られたやうである。

「何でもない、霧之助様に逢ふのには……」

花政の以前に、既に少尉が居て、渠さへ如何とも、詮術を知らないのであつた。

其のまゝ、仰向けにまた引倒して、雪にもみぢを散らす如く、井戸の水を浴びせたのである。みどりのしたゝる黒髪は、ぬれ絡はつて、脛もあらはな、裳の其より長かつた。

「何うぞ、霧之助様に……」

「いゝえ、まだ此の上に、家風に従はねば不可ません。子爵家は儉約を主とします。誰か、糠味噌を掬つて来て、此の女に食べさせなさい。入ものは、犬のが宜い。」

花政は總入齒を嚙碎いた。が、少尉があつて劍を抜かぬものを如何する。

「此も家風です。」
鮑貝に糠味噌を、車夫の手から、頬のあたりへ突着けられて、和歌子が、熟と見る頬を、足を擧げて、足袋の尖で、子爵夫人が、ぐい、と擡げた。

花政が少尉の手を抑へて居た。

「いろと世帯を持つには、お香物が大事ですと
さ、あゝ、おいしい！」

子爵夫人が、塵を排つた。

「明日來なさい。」

屹と和歌子が顔を上げて、

「それも御家風かえ。」

「家風です。」

「何と、」

と、すつくり立上つた。が、病後のつかれと、足の痛みに、よるめいて倒れた時である。

「此處だ、旦那、お抜きなせえ。」

「可。」

長劍の鞘を拂つて、きらりと翳した、師團屈指の腕白大將。

「松平龍介、さあ、撫切だぞ。」

土足で御殿へ踏込んで、霧之助を抱いて、奪つて
出た。自分の女の戀人を、男の意氣は潔や。

其その黒くろ小袖こそでの前髪まへがみを、胸むねにひしと緊しめた時とき、あは
れ見みよ、人々ひと／＼よ、和歌子わかこの姿すがた、膚はだへも、衣きぬも、たゞ寒かん
月げつの光ひかりであつた。

玉たまの指ゆびが觸さはると鞘さや走る、黄金こがねづくりの太刀たちを逆手さかて
に、氷こほりの中なかなる火ひの如ごとく、乳ちを薄紅うすれなぬに波打なみうつて、戀こひ
に燃もえつゝ牡丹ぼたんの花片はなびら散ちるが如ごとき其その心臓しんざうの只中ただなかを。

【完】